影武者のヒナタ

くろやん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
影武者のヒナタ

【Ｎコード】
Ｎ７９０９Ｎ

【作者名】
くろやん

【あらすじ】
顔が似ているというだけでお姫様の兄役として拾われた一人のストリートチルドレン。その青年は兄の影武者として教育を施されるが遅々として何も吸収できず、ストリート時代に培われた血気盛んな性格が様々な国際問題を引き起こす。そんな問題児をお姫様は無事に兄の影武者として育て上げることができるのだろうか。

太陽と影

「うううおおおおいにいいいさぁぁぁむぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！！！！！」

静謐な朝の静けさをぶち壊す、けたたましい叫び声が館中に響き渡った。丁寧に手入れされた館外の木々の梢でさえずっていた小鳥たちが警戒心をむき出しに四方へと飛び去って行く。

「うぉおおおにぃぃっっさぁぁぁむぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！」

館が震えあがるほど獰猛な叫び声を挙げる声の主はさらにその声量に活力を付けるがごとく全力で廊下を走っていく。その姿は獣が眼中にとらえた獲物を追うようで、途中の曲がり角も全くよどみなく、駆ける速度もまるで落ちない。朝早くから館内の掃除をしているメイド達もその姿を捉えることができず、ただただ巻き込まれないように廊下の真ん中は歩かないようにしているのが彼女らの暗黙の了解となっている。

とある被害者―プライバシー保護のため被害者Ａとしておこう―は廊下の一角を曲ったところ、あの台風ような現象に巻き込まれてしまい一瞬記憶が飛んでしまったと語る。だが、さらにすさまじいのは被害者Ａが拭き取ろうとしていた真鍮細工のインテリアプレートの汚れがきれいさっぱり落ちていたということだ。

被害者Ａ「それはそれは手触りも光沢も作りたてのようにピカピカになっていましたわ。えっ、そんな見間違いなものですか。この目でしかと見たんですもの。ええ、そうです。あのお方はまるで生きる洗浄機ですわ」

「まあぁぁぁぁぁだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁでぇぇぇすぅぅぅぅぅぅのぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーーーー！！！！！！」

声の主があげる言葉は往々にして意味を成していないことが多い。雄たけびのようであったり、親の仇討ちを迫る怨嗟の声のようであ

ったり、自らを鼓舞する自己暗示の呪文のようであったり。その言葉の本当の意味を知っている者はおらず、みなが各々自論を展開するだけの謎の言葉とされている。
判別者B「あのお声は『おいもさーん』っていってるわ、絶対。私見たもん。夜中にあのお方がおいもさんたべてるところを」
被害者A「ええー、嘘おっしゃいな。あのお方が朝っぱらからそのようなことをいうわけないじゃないの。仮にも一国のお姫様なのよ」
判別者B「ほ、ほんとだもん」
被害者A「じゃあ、何の種類のおいもを食べてたのよ。ジャガイモ？サツマイモ？タロイモ？コンニャクイモ？ヤムイモ？サトイモ？さぁどれよ？」
「うううううおおおおうううぅぃぃにぃぃぃぃぃぃぃぃぃゃゃさぁぁぁぁあむっぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！！！！！！」
判別者B「うう・・・。何の種類かなんて分かんないもん・・・・夜だったし暗くて見えなかったし。だ。だけどあの香りは絶対おいもさんのにおいだったんだもん」
被害者A「ふん、確信がないわね。というより、なんなのよ『判別者』って。他にいい呼称があったんじゃないの。なんだかひよこの雌雄を区別する職人みたいで嫌ね、同じメイドとして」
判別者B「ち、ちょっと、いやっていわないでよ。だっていい呼び名が思いつかなかったんだもん」
被害者A「あんた、一番年下だからって甘やかされると思ったら大間違いよ。思いつかなかったって言えば許されると思ってんじゃないでしょうね。ここはジュラム大国なのよ。地方から出稼ぎに来る労働者が絶えない自由と平等の国なのよ。仕事はたくさんあるけれど、それは言い換えれば能力のないものはいくら頑張っても必要最低限の稼ぎにしかならないってことなのよ。あんたみたいにおつむと身長がいつまでたっても成長しないメイドなんて、いつこの館を解雇されてしまうか分かったもんじゃないんだからね。・・・・む、む、胸ばっかりおっきくなっても、い、意味無いんだからねっ！！

さぁ、はっきりしなさいよ！！ナガイモなの！？ヤムイモなの！？なにイモなのよ！？あと、何カップなの！？この際だから、その、反則、並みの、むねも、はっきり、してもらおうじゃ、ないの！！」
仲介者C「こらこら突っつくな。優しくしてあげなよ。この子も頑張ってるじゃないか」
判別者B「ぁん、いやぁん。ちゅうかいしゃしぃ～。ひがいしゃえーがいじめるぅ～」
被害者A「ほらまたそうやってすぐ逃げる！！目の前に越えられない壁ができたらきょろきょろ周り見て簡単な方へ逃げ出すんだから！！そんなんじゃいつまでたっても一人前のメイドとして成長しないんだからねちょっとは自分一人で解決策を考えたらどうなのよあんただってこのままでいいと思ってないでしょなんのためにこのジュラム国にまで働きに出てきたと思ってるのよだから何カップなのよ！！！」
仲介者C「あんたもうるさいな。口ばっか動かしてないで手ぇ動かしな。もうすぐメイド長がくるよ。さぁ、仕事に戻りな」
判別者B「ぐすん・・・・・何イモなんて知らないもん・・・。口うるさいなぁ・・・」
被害者A「うるさ・・・ってあんた！！！あんたのためを思って言ってんのよ！！それをうるさいだなんて！！もうあったまにきた！！あんたがはっきりとしないのなら言わせてもらうけれどね、体とのバランスも合わせてのプロポーションなのよ！！イモだけ・・・違った、ムネだけ大きくなってもまっったく意味無いんだから！！全体との兼ね合いが命なのよ！！分かってんの！？」
仲介者C「話が変わってるぞ」
判別者B「・・・・・・Aはなんでしょ、どうせ・・・。だから自然とAを選んじゃうんだよ」
被害者A「はっ！！もしやこれはそういう意味も込められているの！？そうなの！？私のはAなの！？あれだけ毎日マッサージしているのに、私はAのままなの！？教えなさいよ！！はっきりとしたサ

イズを教えれば私のと比較対象してすぐに分かるかもしれないぎゃっ！！！！」
「いいいいいいいつぅぅぅぅにぃいいなぁぁあああぁっっっっったぁぁらぁぁぁぁぁでぇぇぇえすぅぅぅぅうのぉぉぉおおーーーーー！！！！！！！！」
「おい・・・大丈夫か？Ａよ？真正面から踏みつぶされたな・・・。いやはや屈んで作業をしていたとはいえ、さすがにあのお方も気付くものだと思うのだが・・・」
　目の前の障害物を避けると言うことも知らない爆走者は、あっと言う間にその場を過ぎ去っていくので誰も走っている姿を見たものはいない。すくなくとも鬼の形相をしていることであろうことは、あの見た目も身なりもお構いなしの速さから判断はつく。気品や立場といったもろもろの体裁をまるで意識の片隅にも置いてはいないだろう。
「うううううう・・・・」
「まあ、仕事をさぼっていた罰だと思うんだな」
「だ、大丈夫？Ａサイズ？」
「うううううううるさーーーーーい！！！！！サイズは関係ないでしょーーーー！！とっととあんたも白状なさーーーーい！！！」
　直接関係のないメイド達の立ち話の議題にのぼってはコミュニケーションの疎通に図られていることも、渦中の人物にとって預かり知らないことであるが、そんなことはその人物には一言も耳には入っていない。いや、耳に入る前に既にその場所には居ないのだから。
「おぉおおおにぃぃぃぃぃささぁぁっっとととと！！！！！！・・・・・・っぅぉぉぉぉぉにぃぃさぁぁぁまぁぁっっ！！！！！」
　最後の角で左右に陳列されているガラスの甲冑の一体の腕にぶつかり、危うく２００万ダリオンが大理石の廊下に粉々になってしまいそうになったが、人間離れした瞬発力で急ブレーキ、そして華奢な細腕で自分の身長の２倍は優にある甲冑を受け止める格好でガシッと支えたのだった。それでも顔だけを１５ｍ先の目的地の扉めが

けてキッと向けて叫ぶことはやめない。傍からみれば異常な光景だが、この最後の長廊下には幸いにも両側には部屋などはなく、ただただ壁が続いているだけであった。だからというべきか、少しでもこの長廊下で物音をたてさえすれば部屋の主に聞えてしまって警戒されるのだが、その部屋からは全く何の反応もない。空き部屋のように静かだ。

「ぅぅぅぅぅぅっぉぉぉぉぉおぉぉぉぉぉぉぉぉッッ！！！！——」

仇討ち相手に出合ったような形相のまま小さな体をバネのように一度沈ませ、その勢いで甲冑を持ちあげて元の位置に立たせるや否や一気に加速し、速度を緩めずにそのまま扉へ突っ込んでいった。

「——ッッぃぃににぃぃぃぃさぁぁぁぁまぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

5メートルはある大扉を錠もろとも蹴破り、転がりこんだ。そこは一人のためにあてがわれた部屋のようには見えず、大家族が悠々と住めるだけの広さがあった。一体何人分の姿を映すつもりなのだろうかと目を見張るほど馬鹿でかい鏡台や、十人分の季節ものの衣類がすっぽり収まってもまだ余裕がありそうな洋服箪笥、そして大人5人が寝そべられるほど大きな書斎机が悠然と整えられていた。その一つ一つの家具調度品が手の込んだ特注品と見分けがつけられるほど豪奢で、手袋を着用して触れなければならないと委縮させてしまうほど高価なものばかりである。

そして、その余りある大部屋のど真ん中に天蓋付きのキングサイズベットがでんと置かれていた。清潔感あふれる純白のレースが掛けられ、ボトムやヘッドボードには純金の装飾が施されており、よほどの王族が使用していると見る者の想像を働かされるが、そんなこともお構いなしの傍若無人少女はその寝台までどしどしと足をふみならしながら近づいていった。そしてそこで優雅に寝ている男を見据えては何のためらいもなしにシルクの毛布を思い切りはぎ取り、枕を勢いよく引っこ抜き、まだ夢の中のその男の首根っこをつかも

うと手を伸ばしかけ——たが、一瞬その手を止めてニヒルな笑みを浮かべて男の右耳をむんずとつかんだ。そして

「おおぉぉぉぉぉおぉぉぅぅぅにぃぃぃいいいさぁぁぁぁぁああぁぁまああああぁぁぁぁーーーーーー！！！ぅぅおおおはぁぁぁよょぉぉぉぐぉぉおおぉざぁぁぁぁああぁぁぃぃぃいいいいまぁぁぁあぁぁぁぁすぅぅぅぅーーーーーーっっ！！！！」

　その耳元で朝の挨拶をした。空気が波打つのが目視できるくらいの大音量で。

「っっ！！！っのぅわうぇぇ！！！！？」

　意味のない素っ頓狂な言葉を発しながら男は沖に上がった魚のように勢いよくベットの上で身を跳ね起こした。

「いってぇーーーーっ！！！！頭が・・キンキン・・する・・・・。・・んふぇ・・・・うーん、んぁ・・・・」

　自体がまるで飲み込めないといった様子で眠気まなこをこすり、一体何が起こったのかを把握しようと辺りを見渡す。そして、なぜだか理解できないといった表情のままとりあえず耳を引っ張り上げられている手を払ろうとした。が、さらにぐいっと持ち上げられ男は不当にも首を９０度曲げたまま、ベットからひきずりおろされてしまったのだった。意識がまだ覚醒していないのだろうか、無抵抗のまま転げ落ちて頭から地面に突っ伏す格好になった。ぐえ、と押しつぶされたカエルのようなうめき声をあげ、男はもぞもぞと身をよじらせた。そしてやっと状況がつかめたのだろう、むくっと瞬時に体を起こし、眉間にしわを寄せた表情を闖入者に向けて口を開いた。目の前数１０センチのところにある少女の顔に向かって。

「また、これかよ！！！何度言ったらわかるんだよ全く！！自分で起きることぐらいできるわ！！！こんな荒っぽくて急激な朝の起こされ方なんて聞いたことないぞ！！それとも何か、これが王宮の朝の目覚め方とでもいうんじゃないだろうな」

「あら、私はお兄様のお目覚めがよろしくなるようにと東館からずっと『おはようございます』と朝の御挨拶を申し上げていますのよ。長時間の睡眠中に急に外部からの障害で脳に刺激を与えるのはあまりよろしくないので、段階を踏んでお気持よくお目覚めになるようにと考えたのですが」

「ひ、東館ってお前。ここは西館じゃねえか・・・・。どれだけ朝っぱらから他のみんなに迷惑かけてんだよ。だいたいな、目が覚めた瞬間からお前の無駄に高いテンションなんてついていけねぇし、そもそも一番最初に見たくもない顔を見せられるなんてたまったもんじゃないぜ。俺は俺の朝のお目覚めタイムってもんがあるんだよ。それをお前はまるでおもちゃを扱う遊びのように――」

「おにいさま」

「っんだよ！！人の話を聞け！！」

透き通るように凛とした声で男の抗議をさえぎり、そして薄ピンク色の寝巻を軽くパッパッと払っては両手を殊勝に重ねそろえて

「おはようございます、ね」

満面の笑顔で言ったのだった。少し傾け気味にした小さな輪郭からこぼれおちそうな笑顔を、愚痴をこぼしていた男に向けて、日課の一つを果たしたのだった。

「・・・・・・・っああ、『おはよう』」

深いため息とともに煮え切らない様子でお兄様と呼ばれた男もぶっきらぼうに返した。ガシガシと頭をかきながらまたもこうして１日の仕事が始まるのかと気に病んでいることは言わずもがな彼の表情から推測できよう。ほんとにこんなところに来るんじゃなかったと今さらながら後悔していることに違いない。

背後でガラスが砕ける音と後を追ってきた目付役の悲鳴を今日の朝の副旋律として残しながら。

朝の戯れ

王侯貴族ないしは商人豪族などの地位と権力を約束された富豪らの家々には、ごたぶんにもれずどの部屋もとてつもなく広い。大広間はもちろんのこと客室や応接間、浴場、食堂そして侍女執事らの居室に至るまで、その地位を示すかの如く豪奢な作りに徹底している。下手をすれば、それこそ王族の一室が平民住居ひと棟に匹敵するといっても過言ではないほどの大きさである。

「早く食べなさいよ、ほんとにどんくさいんだから。朝起きるのが３０分遅れたから今日は神学と占星術、それに古代史も１０ページ追加ね、それぞれ」

貴族らはその余りある大きな居室を贅の限りをつくして装飾を施し、ソファーなどでふんぞり返っては使用人を顎で使いまわして生活し、そのために彼らの性格たるや理不尽極まりないほどわがままで自分勝手な種類の人間である、と世間一般では理解されている。そんなわけで一介の下流中流階級の平民達にとっては貴族など雲の上の存在のように見えて、同じ人間のように考えられないのが常だ。

「なっ！！！ちょと待てよ！！昨日の統制学ってのと訳分かんねぇ作法ってやつがまだ残ってるじゃないか！！さらにおもしろくもない勉強も１０ページも増やすのかよ！！そんなんじゃあこっちの精神がもたないふがっ―」

「食べるか話すかどっちか一つにしなさい。私のお兄様はそんなはしたないことはしないわよ」

が、平民が幻想を抱きがちな金持ち貴族たちの生活とは裏腹に彼ら貴族らも平民たちと同じ人間なのであり、フォークに差したソーセージとマフィン、そしてスライストマトを無理やり口にほおり込んでは反論を一蹴するという、ガチガチの行儀作法に固められた食事方法とは程遠い下品な朝の風景も行われたりするのだ。

そんな光景など、平民の間でも行われているとは思えないが。

「――おふぁふぇ！！ふぉんんふぁつっふぉむなぁ！！」
「だから言ってるでしょ、食べながら喋ってはいけないって。ほんとに進歩しないんだか・・・・らっ！！」
　口の中に詰め込まれた食べ物を嚥下するのに苦しんでいる青年の背中を右手で思い切り叩いた。そして小さな肩を大きく上下させた少女、ラインハルト国の姫は深く長いため息をついた。男のうめき声が憎しみの声に変わったのを気にもせず、姫は自分の食事を続ける。ひと口サイズ―といっても小指ほどの形という小ささであるが―にちぎった焼き立てのマフィンに少量のバターをつけ、ゆっくりと咀嚼して味わうその姿は生ける気品というべき優雅さが漂っていた。あるいは動く芸術作品か。
　ちぎったマフィンの大きさから推測できるように姫は『少女』と呼ぶのにふさわしいぐらい小柄で、肩まである髪が小さな顔をさらに小顔に見せる。少し赤みがかった明るいブロンドの髪は全体的に軽くウェーブしていて、はめこまれたような丸い緋色の両目は少し伏し目がちで不満げな様子だ。
　ここはジュラム大国のサウスラン城別棟に設けられている客室用館の食堂である。客室用といっても姫たちが席についている長テーブルは優に２０ｍはあり、食堂と厨房の間に設けられた控え室にはメイド、侍女、下女も含めて８人が控えている。客室用でこれほどの大きさなら、本城は一体どれほどの馬鹿でかさなのだろうか。一国に占める地位と権力の莫大さが想像できよう。だが、今はそのテーブルのわずか3席しか使われておらず、閑散としている。姫とうたわれた人物も、どこか居心地悪そうにそわそわしているように見える。まるで、自分の館でないかのように。
「まぁまぁ、姫様。これからこのアナキス君を教育していけばいいのですから、焦る必要はありませんわよ。時間はたっぷりあるのですからね」
　バスケットに入ったマフィンのこうばしい香りの間隙をぬって、ローズの甘い香りを漂わせる女性―ジュラム大国の枢機卿のシルマ

ールが口を挟んだ。彼女は姫の左隣に座っており、出された朝食には手も付けずに組んだ両手に顔を乗せながら姫を愛おしそうに眺めていた。

そのシルマールへとがばっと顔を向けて

「シルマール先生！！先生は甘いのです。私はこんな下品で知能指数がまるで犬以下の男がお兄様の名前を借りているということが許されないのです。ことに状況が状況で私としても我慢しなくてはいけない部分もあるでしょうが・・・。ですが・・・ですが・・・」

口元を両手で覆い隠し、まるで劇中の台詞のような声をあげた。表情もはりのむしろに座らせられたかのような趣を醸し出している。勢いよく振り向いた時にブロンドの髪が青年の頬を打ったのも気にも留めずに。そしてその言葉を聞くや否やシルマールも居住まいを正して真っすぐ姫を見つめ、その姫の華奢な両手をギュッと握った。

「心中お察しいたしますわ、姫様。わたくしめもこのアナキス君を街中で見かけたときは兄上様と瓜二つで大変驚きましたが、一方でなんという僥倖が舞い降りたのでしょうと喜びを隠しきれませんでした。この神の偶然の計らいをいただいて、アナキス君を少しでも早く兄上様の影武者に育て上げ、姫様をご安心させたいと思っております。ですが、何と申し上げてもやはり私の目に狂いがあったのでしょう。これほどの無骨者だとは思いもよりませんでしたわ・・・。こんなにも外見はあの器量よしの兄上様に似ていますのに、中身はまるで正反対。このままでは姫様にとって苦衷をさらに募らせてしまうばかりになってしまいます。なんとお詫び申し上げればよいやら、言葉がございませんわ」

「そんな！！先生は悪くありませんわ！！この単細胞バカが悪いのです。もう少し容量良く考えれば良いものの・・・。この影は未だににそこらへんに生えている雑草を見るとよだれを垂らすほどのバカで―」

「んぐっ。た、垂らすか！！」

スープの皿を片手でぐびっと飲み干し、やっと口の中のものを咀

囁したアナキスが叫んだ。
「やっ、汚いわね！！唾を飛ばさないでよ！！唾を！！」
叫んだ勢いでアナキスの口から出たスープやマフィンの残りカスが背を向けた姫の髪に飛び散った。姫は器用に美眉を釣りあげた表情でまたアナキスの方に振り返った。シルマールに握られた手をほどいて、指先から煙がでるほどの憤りを込めてアナキスを指さした。
「知らねーよ、自分で避けろってんだ！！そもそもなんなんだよこの扱いは！！安定した仕事をやるって街中でごつい騎士のおっさん達に言われたから、てっきり傭兵か間諜かと思ったのに、お前みたいなわがまま娘のお守だなんて。しかも長時間椅子に縛り付けられて勉強だの作法だの叩きこまれてよ。こんなんじゃもとのストリート時代の方がよかったぜ。根なし草で、その日暮らしだったがそっちの方が自由でマシだ。今からでもいい、俺をこの地獄の館から出してくれ！！」
さされた姫の指に噛みつかんばかりの勢いでアナキスはまくし立てた。
物事の判断というものは主観的に語られてしまい、冷静な思考でその決断を下すことができないことが多い。特に予想と全くかみ合わないような結果になれば、人はその内容に理不尽さを見つけようとして広い視野をないがしろにしてしまう。自分が正しく、相手が間違っている。頭から決めつけその差の埋め合わせを要求しようと躍起になるのだ。そのようなことをするのが子供と称される人間であり、そのようなことから妥協点や時には諦めを導き出すのが大人と分別できるのなら、アナキスは当然のごとく理屈なしに子供というべきか。
「馬鹿なこと言ってんじゃないわよ。あんたは正式にあの誉れ多いお兄様の影武者としての任務に抜擢されたのよ。怖れ慄くこそすれ、もっと誠意と敬意を持って任務にあたってほしいものね」
「だから、その兄上様とやらは一体どこにいるんだよ！？俺がこの館に来て2週間、まだ一度見たことがないぞ。お会いしてご挨拶の

一つでもしてみたいものですな、おひめさま」
皮肉たっぷりに言い放ったアナキスは両の手を上に向け、肩をすくめた。彼が隣国のラインハルト国次期皇子である姫の兄の影武者として連れてこられてから2週間、影を務めるにあたって未だに当事者と会ったことがないのだ。いきなり一国の皇子の影武者をやれと言われても、まるで接点のない人間の真似なんてできやしない。

だが、唯一救いなのは記憶喪失の設定と言われたことだった。

記憶喪失なら全く別人がなりすましても本物なのか偽物なのかそうそう分かりはしない。つまり、俺は今外見が似ているというだけで記憶をなくした皇子様の役を担わされているのだ。廊下でメイドら使用人とすれ違っても、無言で通りすぎればいいだけなのだ。それでも一体どこまでを忘れた前提でなりすませばいいのだろうか。全くその基準がつかめずに2週間が過ぎたのだった。
その不満を―アナキスにっとって不満はそれだけではないが―姫と言い争うたびに持ち出すのだが一向に本物の皇子様とやらに会わせてはくれないのだ。唯一この館に来て覚えたことと言えば、その話題を持ち出せばわがままお姫様が黙るということだけだ。
「う・・・・。そ、それは・・・その・・・」
先ほどの元気が嘘のみたいに、まるで目にした者を立ち止まらせるほどの美しさをもつ花が萎んだかのように、段々と表情が曇っていく。視線も泳ぎ、アナキスに合わせようともしない。少し紅潮しているようにも見えるが、顔を下げてしまってよく分からない。
「なんだよ、そのいいたくなさそうな感じは。絶対何かあるな、お前の兄上様とやらには」
「何もないわよ・・・ただ、その・・・・・」
「今、兄上様は外遊なさってるところなのよ、アナキス君」
テーブル横に置いてあるナプキンを使って、姫の髪の汚れを丁寧にふき取っているシルマールが代わりの言葉をつないだ。

「だからちょうどこのジュラム大国にはおりませんので謁見することもできませんわ。兄上様はジュラムの隣国であるラインハルト国の御子息。心苦しいことですがお命を狙われてもおかしくはない立場のお方です。そのための影武者として、兄上様と瓜二つのあなたが選ばれたのですよ、アナキス君」
「ほんとに外遊とやらをしてるのか怪しいもんだぜ。というより選ばれたとかなんとか言ってるけどな、俺は簡単に命を狙われるような影武者なんか望んでいないし、やりたくもないんだよ。いいか、これは拉致だぞ。皇子様の影武者とかなんとか聞こえのいいことでまとめようとしてるけどな、こんなことが自由と平等の国ジュラムで許されていいと思ってるのか。シルマールさんよ、あんたこのジュラム国の枢機卿をやってるんだろ。そんなお偉いさんがこんな大問題を先導していいのかよ。―ってか、そもそもなんで隣りのラインハルト国のおひめさまがこのジュラム大国にいるんだよ？おかしいじゃないか。なんでだなんだよ。自分家があるならとっとと早く自分の家に帰りやがれ・・・・って人の話を聞けぇーーーーーーーっ！！！」
　アナキスが飛ばした汚れをふき取るのと一緒に、シルマールは姫の髪も梳かしていた。その姫はと言えば恍惚そうな笑顔でシルマールに身を預けていたのだ。全くアナキスの言い分など耳に入っていないといった様子で。
「うるさいわね、朝っぱらから。ちょっとは小鳥のさえずりにでも耳を傾けようとする風情な気持を持ったらどうなの。静謐な朝の調べにその穢れきった心も少しは洗われるんじゃない」
「・・・朝からうるさいのは一体誰だよ」
「ま、私の繊細な気持ちに土足でズカズカと入ってくるような、ぶしつけな性格もなおしたほうがいいわね。お兄様はそんなことしないわ。優しく問答してくれるわよ」
「お前・・・。人の話を無視するな」
「犬でも二、三回教えられたら覚えるようなことも、この影武者は

五回、あるいは六回は教えないとだめね。あーあ、先が思いやられるわ全く」
「心中お察しいたします」
「大体、朝でも自分で起きるとかなんとか言いながら、放っておくとあんたお昼まで起きないじゃないの。そんな怠惰な生活面も改善しないといけないわ。・・・そうだ！！いいこと思いついたわ！！私のお部屋の隣にこの影武者を住まわせればいいのよ。そうすればすぐに起こして差し上げられますわ！！」
「全力で却下する！！ってかまた話をすり替えやがって！！俺の質問に答えろーーー！！」
　そのことでまたもや二人は言い合いになり、静かな朝の食事と言っているどころではなくなってしまった。そんな二人を見守りながらシルマールはクスクスと破顔した。髪を梳かす手をそっと止め、その視線はまるで我が子を見守る母のように暖かく慈愛に充ち溢れていた。一人のメイドがシルマールに耳打ちをするために控え室から出てきたのも気づかないくらいだった。
「あら、もうそんな時間ですか。朝の遊戯もこれまでですね。・・・姫様」
　メイドから食事の終了時間を告げられ、シルマールは姫の肩にそっと手を置いた。
「もうすぐ兄上様のお勉強の時間でございますよ。さぁ続きは姫様のお部屋で・・・」
「はぁはぁ・・・分かりましたわ、先生。毎回毎回お手数をおかけしてほんとうに申し訳ありません。・・・聞こえたでしょ、お・に・い・さ・ま。行きますわよ」
　メイドが片づけのためにぞろぞろと食堂内に入ってきたため、姫は居住まいを正して、アナキスのことを記憶をなくしたお兄様として扱うように切り替えたのだった。アナキスがラインハルト国の皇子の影武者という事実はジュラム国枢機卿であるシルマールを含め、ほんの数人しか知らない。他の者には、アナキスのことを本当のラ

インハルト国皇子と説明しており、また記憶がほとんどなくなっているからあまり話しかけないようにと忠告もしている。そのため、アナキスは影武者ということがばれないように、常に気をつかっていなければならないのだ。
姫はアナキスに向かった優しく話しかけた。
「べ、勉強だ・・と・・・・・!?・・・・・きらい」
「何言ってるのよ。勉強ほど楽しいものなんて他にはないじゃないですか」
むんず、とアナキスのシャツの襟首をつかみながら、椅子からぴょこんと降りて姫は引きずるようにしてアナキスを席から立たせた。急に引っ張られてアナキスが転げ落ちたのも目に入らず、姫はこれからはじまる恍惚な時間に意識をめぐらせていた。
「無知蒙昧から一筋の光を見つけ出す知識の旅へと向かう・・・。ああ、なんて楽しくて意義のある行為なんでしょう。全く人類が知というものを発明してから、考えることを止めることはできないのですよ。分からなかったことが分かったときに人間は成長するのです。その末端でもいいから私達が関わることができるなんて、素晴らしいことじゃないですか、お兄様。そもそも古代イシュットの―」
「いやぁぁーーー・・・!!」
欲しがっていたお気に入りのおもちゃを手に入れた子供のような足取りで姫は食堂を後にした。アナキスの狂気の叫び声を残して。

朝の戯れ　二

「ふふふ、良かったわ。姫様があんなにお元気になられて・・・。アナキス君にはしばらく傍にいてもらった方がいいわね」

メイド達が長テーブルの上に置かれた朝食を手早く片づけ始めていたが、そんなことも目に入らないといった幸せそうな様子で姫とアナキスが出て行った扉の方を見ながらシルマールはひとりごちた。二人が言い争う姿を思い出してくつくつと小気味いい笑い声を立て、そのたびに長い巻き髪がふわふわと揺れる様子が妖艶な雰囲気を醸し出していた。テラスへと続く窓の外から暖かい太陽の光が食堂を照らし出し、その光を受けた枢機卿はまるで一枚の肖像画のようであった。そのような高名な高位聖職者の姿に見とれてしまってメイド長に叱責された一人の小柄なメイドがいたほどで、気軽に会話など交わせる者はこの食堂の中にはいなかった。

だが―

「そのようなことを誰が許したのかの、シルマール枢機卿。儂は了承した記憶はないが」

気軽な会話ではなくシルマールに提言をする者はいたのだった。

誰にいうでもなくふと漏れ出たシルマールの独り言に、しわがれた声が返ってきた。その声の主は姫が座っていた椅子のちょうど真後ろから、やおらゆっくりとした足音を立てながらシルマールに近づいてくる。短く切りそろえられた白髪交じりの頭をしており、頑強そうな顔には深いしわが刻みこまれていた。体系は小柄であったが、ゆったりとした立ち振る舞いと圧倒的な威圧感から並々ならぬ生涯を送ってきたということを見る者に想起させる。右目にかけたモノクルの奥からは衰えのない意志の強さが光って見えた。

いつからそこにいたのか気付かせないほど気配というものを消していたその老人であったが、シルマールは驚きも振り返りもせず始めから声をかけられることを知っていたかのようにじっと居座って

いる。そして飾り用とした置かれた目の前の果物の盛り合わせからブドウを一粒もぎ取り、おもむろに皮をむき始めたのだった。
「これはこれは、ガサラム士官殿ではないですか。朝食はもうお済ですか」
「結構。水だけでよい」
ガサラムと呼ばれた老人は慌てて朝食の用意をしようと厨房へ行くメイドらを手で制し、近くにあった水をガラスコップに注いだ。
「あら、しっかりと朝食はお摂りになった方がよろしいですよ。ラインハルトからこちらに来て2週間、満足のいく食事を摂られていないのではないですか？まさかこちらの食事に毒などが入っているとお思いなんじゃありませんか、ふふふ」
水を堪能するかのようにゆっくりと飲み干して、憮然とした態度のままガサラムはシルマールに相対した。地に足が張り付いたようにじっとして動かず、メイドが食器を運ぶ音だけが二人の間にわだかまっていく。右腕のラインハルト国の象徴である鷲とブバルディアの花をモチーフにした腕章がまるで自己主張するかのように輝いており、差し込む太陽の光にも負けないほどだ。
とうとうシルマールの方が、ブドウの皮をむく手を止めずに口を開いた。
「・・・ですけど、あのアナキス君のおかげで姫様の御気分はすっかり良くなりましたよ。確かに彼の言動や行動にはこれから兄上様の影武者として使っていく上で目を光らせる部分が多くあると見受けられますが、それでも姫様に与えた影響というものを考えると、さしてそのようなことは問題ではないと思われますが」
そう言って、丁寧にむき終わったブドウを空いた皿に乗せていき、3つむいたところでナプキンで手についたブドウの汁を拭き取った。そしてシルマールは、次はこれですわといった様子でレモンを手に取り、メイドからナイフをもらって滑らかな手つきで皮を向き始めた。鼻をさす酸っぱい香りがガサラムにまとわりつく。
「それは儂も認めよう。我が祖国ラインハルトがハバリアント連合

に宣誓布告強襲をされてから早2ヶ月。姫と儂たち数人の側近を除いて、まだ多くの兵士たちは戦火の絶えないラインハルトに身を置いておる。その現状を考えるだけで、とても気の休まることではない。ましてや父上と母上の無事を御心からお祈り申し上げておる姫にとって、それは耐えられるものではなかろう。日に日に御加減が悪くなるのを見ているだけで胸が痛めつけられるほどじゃ。そのような状況の中、安息を求めて友好国であるこのジュラム国に身を寄せることができたことは、行幸としか言いようがない。快く受諾してくださったジュラム皇帝と枢機卿の計らいには感謝してもしきれない程じゃ」

「あら、どういたしまして。あの頑固で一刻な老人のガサラム氏からそのように軽々しく謝辞が出てくるとは思いもよりませんでしたわ」

自由と平等の国ジュラムに来て少しはお堅い頭も柔らかくなったのかしら。と、皮肉も交えながら応対したシルマールであったが、どこかその話し方にはガサラムと距離をはかっている節が見え隠れする。一枚壁を隔たせたようでありながら表情には喜色満面の笑顔で対応する態度には、様々な種類の人間と長年関わりあってきた熟練の接し方とでも呼べるほどの安定感があった。

「問題が起こった際に、儂がその問題に携わることに必要性を感じたときには口に出す性分なのじゃよ、枢機卿。それは翻して無関心が多い分、一つのものに傾注する度合いが大きいという意味でもあるじゃろう」

しわがれ声の端々に周囲の空気を圧搾して震わせる力が込められていそうで、聞く者を萎縮させる重さがあった。仕事をこなすメイド達もガサラムの周囲5メートルには近づけないといった様子で動きづらそうにぎくしゃくしている。

そして、ガサラムは相手の皮肉にも眉ひとつ動かさず、右目のモノクルをかけなおし、皮をむいているレモンを見つめるシルマールの目を見て言葉を続けた。

「つまり、これだけははっきり申し上げておこう。姫の御加減を最優先事項として取り上げるのはもちろんのこと、我が祖国の名高い格式や戒律を損なうような行為は断じて許されうるものではない。あのような躾のなっていない野良犬などを姫の御傍に置いておるだけで儂は我慢がならんのだ。姫の御心が穢れてしまうだけじゃ。百害あって一利なしとはまさにこのこと。私が姫の目付役として控えておる限り、枢機卿よ、あんたの好きにはさせんぞ」

ガサラムは公然とジュラム国枢機卿に向かって言い放ったのだった。力を込めた最後の言葉が予想以上に大きく響き渡り、メイド達の手を止めてしまう程であった。傍から見れば、枢機卿が喧嘩を売られているような構図に見えるだろう。小鳥さえも場のいく末を聞き耳立てて見守っているように、さえずりがいつの間にか止んでいる。二人を包む異様な空気が周囲を静まり返した。

だが、シルマールは緊張というものをマシュマロか何かのように思っているのだろうか。ガサラムの言葉を全く意に介した様子もなく、まるで聞かん坊の生徒を諭す教師さながら二コリと微笑みかけたのだった。

「先ほど士官自らが仰った自身の性格から察するに、目下の傾注の度合いは自国の懸念よりも姫様に傾いていらっしゃいますのね。分かりやすくてよろしいですわ」

酸っぱい香りとあいまって漂ってくるローズの甘い香水がガサラムの鼻を刺激したためであろうか、それともあまりにも話がかみ合わないシルマールの物腰とその笑顔が原因となったのだろうか、ガサラムの眉間に数本の皺が走った。そしてその表情のままシルマールが何を言い出すのかをガサラムは待った。見当違いな返事に窮するというわけでもなかったであろうが、ガサラム自身この枢機卿がこの先何を言い出すのかを聞きたかったためでもあるだろう。

当のシルマールはガサラムの射すくめられそうな眼光にも臆することなくたっぷり１０秒待って、レモンからゆっくりと視線をあげたのだった。

「私が拾ってきた犬っころです。面倒は私がしっかりと見ますので、氏は何も心配なさらずに。氏のいう格式も規律もないがしろにはしませんよ」
右後ろ隣に立っているガサラムに体を向け、少し顔を上げてからシルマールはただ自分が思っていること淡々とした雰囲気で言葉を紡いだのだった。ひょうひょうとした物言いとは違った一面を期待していたガサラムであったが、つかみどころの見えない物腰のままで、全く肩すかしをくらっただけであった。反論でもなく反駁でもない柔和な構えのシルマールはすくっと席から立ち―
「過剰な心配はお体に毒ですよ、もうお歳なんですから」
労りの言葉をかけた。二コリと口の端を上げ、お辞儀をしてガサラムの脇を通って行った。そして周囲のメイド達にもその微笑みの残り香を分けるかのように顔を巡らせてから、ゆったりと足先を食堂出口へと向けた。メイド達は、どんな悪人でも許してしまう聖人のような微笑に無意識に固くなった顔が綻び、思い出したかのように自分たちの仕事を再開し始めた。食堂内に先ほどの雰囲気が戻った。
ただ納得のいかない表情のままのガサラムだけは顔を巡らせてじっとシルマールの背中を目で追っていたが、ジュラム枢機卿は振り返ることもなくふわりとドアから出て行った。
「目狐め。・・・・・一体何を考えておる」
自然と口からついてでた言葉は食器や掃除を始めたメイド達がたてる音にかき消され、誰の耳にも届かずにただの振動となって消えた。
このジュラム国に来て姫の様子は変わってしまった。もちろんそれはガサラムも認める良い方向に変わってしまったという意味で喜ばしいことである。喜ばしいことであり、今さらながら少し前の塞ぎ込んだ状態に姫が戻るという愚行なども一切却下なのである。だが、姫のことを幼少の頃から今日までずっと見てきたガサラムにとって、自身の力ではどうすることもできなかったことが、ある一人

の男の出現でこうもあっさりと変化を引き起こすということに幾ばくかの恐ろしさを感じずにはいられなかったのだ。全身全霊の信頼を置いていた兄が帰ってきたと、たとえまやかしだけでも姫の気分が紛れるのなら利用しない手はないが、でもそれでもガサラムは頭の隅にしこりが残ったようなすっきりとした気分にはなれないのだった。それが、あの一体何を考えているのかどうか分からない枢機卿が先導したこととあってはなおさらであった。

未だに眉間に皺の寄ったやりきれない表情で佇んでいたガサラムであったが、モノクルの奥の眼がきれいに皮がむかれた一粒のブドウとレモンをとらえた。悶々としていても埒が明かないとかぶりを振って今のやりとりを頭から出そうとし、そしてブドウを一粒口に放り込んだ。まるで自己主張でもするかのようにおおきな種がガリっと砕け、甘い味と先ほどから鼻につくレモンの香りが口の中で混ざった。はっきりとしない感覚が頭の中を駆け巡って思考を乱していく。

朝のお勉強

「うぐぁぁぁーーーーーーー！！もうやってられるかーーーーーーーーっ！！！！！」

アナキスはブロンド色に染められた髪の毛をかきむしりながら悲痛な叫び声を上げた。反響したこだまも同情めいたように震え、身を寄せ合うように小さくなっていく。

ここはラインハルト国サウスラン城別棟に建てられた客室用の館である。その東館２階にある図書室にアナキスは居た。図書室は円を描くように丸く、そしてその円周に沿うようにして天井まで伸びる書棚にぐるりと囲まれている。煉瓦造りの空間はどこか殺風景な雰囲気を感じさせ、申し訳程度に付けられた小さな窓からは色とりどりの庭の様子も戯れる鳥達の鳴き声もまるで堪能できない。その窓でさえも、もしもの火災用のために床から数十センチのところに付けられていて太陽の光も全くと言っていいほど差し込んでこないのだ。見上げるほどの高さがある書棚からは威圧感がひしひしと漂うだけで、書物を必要とする目的以外の選択肢を奪われた空間であった。それほど広くはない図書室であったが、３メートルほどの簡易テーブルとイスが閲覧用として真ん中に設けられ、十分なスペースは確保されていた。今はそのテーブルの上に高々と積み上げられた本がどっさりと置かれている。イスに座ったアナキスからは前が全く見えないほどの高さがあり、またその隣に立った姫の身長は優に超えていたほどであった。

「こらっ！！まだ今日の１０分の１もいってないじゃない！！集中しなさいよ、集中！！」

頭の中に詰め込んだものを破り捨てるかのようにガシガシと頭を掻きむしり続けるアナキスに姫は叱責した。整った柳眉が不服そうに曲げられ、目の前に座ったアナキスの頭を教科書でぽてっと叩いた。叫び声をうめき声に変えたアナキスは、抵抗するでもなく机に

突っ伏し、じっとしていられないといった様子で足をゆすり始めた。
　元々ストリートで育ったアナキスにとって、かたい内容の書物というものは手にしたことも読んだこともない。学校なんてものに通うお金など当然のことながら持っておらず、勉強をするという概念が赤ん坊並みに無いに等しいのだ。ストリート時代に教わったことと言えば、最低限の文字であったり、喧嘩の仕方であったり、盗みの仕方であったり、何時にどこの肉屋が残飯を出すかであったりと、一日でも多く生き長らえるための技術であった。
「なんで俺がこんなことしなくちゃいけないんだよ。ほんとに詐欺だ・・・。ただ騙されて連れて来させられて勉強させられて生意気なガキの子守させられ―痛てっ！！」
　教科書に顔をうずめながらふがふがと不平を洩らしていたアナキスであったが、後頭部への衝撃によってその不満も遮られた。
「無駄口叩いてないで頭を働かす。あんたがひと言無駄な事を言うたびに身長が1ミリ縮まると思いなさい。今度は角だからね」
　叩きつけた分厚い教科書を持ちあげ、手のひらでトントンと叩きながらながら姫は口元をすぼめた。ぷっくりと小さな唇がまるで熟れた桃みたいに柔らかそうにたわわに膨らんだ。
「今日はお昼の定例本会議に出席するからたった6時間しか勉強を見てあげられないんだからね。しっかり勉強して少しでもそのスカスカの頭に詰まった内容をつめこんで欲しいものだわ」
「ろ・・・ろく・・じ・・・かん・・・・・・。休憩なしに6時間もこんな拷問みたいなことしてたら頭が破裂するぞ・・・・。って言うか考えたんだが、俺は記憶喪失になったラインハルト国の皇子様の影武者じゃなかったのかよ。何もせずにただラインハルト国の皇子様がこのジュラム国にいるってことを国内外に示すだけでいいって、ただここに居ればいいってあのセンセーってやつが言ってたじゃないか。一番初めにこの城につれて来られた時にそう聞いたぞ、俺は。それならこんな勉強とかしなくても何を聞かれても『覚えてねえよ』のひと言で済むと思うんだが」

パッと顔を上げ、いいことを思いついたという明るい表情で隣に立っている姫へと視線を向けた。この勉強という名の拷問から解放されるのではと希望に満ちた視線で。

だが、姫はと言えば蔑むようにアナキスを見下し深いため息をついただけであった。そのため息で手に持った本のページがペラッと一枚繰る。

「だらしないこと言っているんじゃないわよ。・・・確かにね、あなたをこの館に招き入れた時にそう言ったわ。シルマール先生も私もいい案だと思った。あなたは私のお兄様の影武者。そのためだけに抜擢された人間よ。だけど、あなたはお兄様と瓜二つだけれど、城下町で育った人間と英才教育を受けた人間の中身は月とすっぽんの違いがあるのよ。いや、すっぽんどころか、鳥獣並み、単細胞生物のそれと同列かしら。つまり、影武者として使うにはかなりの・・・・いや、それよりもひっっじょぉぉぉぉーーーに大きな不安があるのよ。記憶喪失という設定でいくらその不安要素は取り除かれるけれど、それだけでは対処しきれない部分がこれから出てくるに違いないわ。国家間での催し物が開かれるような大々的な時にはラインハルト国代表としてこれからはあんたが祝辞を読まなければならないし、お食事のお招きなど小さな行事があったときもマナーに則って粛々と取り図らないといけないし。・・・・それに何よりいくら記憶喪失と設定しておいても私のお兄様の品格や評判がこんな野蛮な人間に貶められるなんて我慢がならないわ！！」

そこで一息ついて、姫はあらぬ方向を見やった。込められた握りこぶしからはみなぎる闘士と燃え上がる熱意が溢れ出しているのがひしひしと伝わってくる。気合いの入った姫を冷ますかのように、開いた教科書で扇いでいるアナキスなどもちろん眼中に入っていないだろう。

「だからこそ少しでもお兄様のように人格者としての威厳が生まれるよう勉強をしているんじゃない。・・・いや、高望みせずに少なくとも大人の受け答えや敬語ができるようになれば私はそれで結構

だわ。・・・いやいや、むしろその野蛮な喋り方さえ改善できればそれでもう私は言うことなしよ。・・・いやいやいや、やはりこのまま生かしておいてもお兄様の名声に中傷被害が広がるだけだし、そうなればいっそのことあんたの存在をもみ消して神格化されたお兄様のままでとどめておいた方が―」

「死ねってことかよ！！」

「大丈夫よ・・・一瞬で済むから・・・痛くはしないから・・・幸いここには私達しかいないから・・・」

「しゅ、趣旨変わってんぞ！！卑猥な指の動きをするな！！」

今にも首を締め上げんばかりの雰囲気で指をうねうねと動かしながら、姫は狂ったように大きく見開いた緋色の両目をアナキスへと向けた。口元の両端を不器用に引きつらせた笑みはまるで冗談のようには思えず、心なしか明るいブロンド髪が逆立って見える。見る者の心を和ませる可憐な一輪の花が、毒キノコに様変わりしたかのようだ。距離を取るように席を立ったアナキスは積み上げられた本群を姫との間に挟み、一歩一歩踏みしめて近づいてくる姫から円を描くようにして逆方向へと回っていく。

一瞬の気の緩みが命取りだな。この自己中心的ませガキを侮ってはいけない。西館から東館まで誰にも姿を見られないほどの尋常ではない速さを生み出す脚力だ。こんな距離なら一瞬で間合いを詰められるだろう。だが、いくらこのチビガキがすばしっこくてもこの俺が負けるわけがねぇぜ。このままうまく距離を取りつつ扉まで来たら一気に加速して飛び出してやる。・・・そもそもこいつは最初から気に食わなかったんだ。傲慢で独りよがりで何でも自分がすべて等しく勝者だと思ってる節がある。一国のお姫様だがなんだが知らないがくそ生意気なんだよ。見てろよ、あと少しで扉に―

「・・・・・・何をなさっているのですか、姫様・・・？」

逃げる算段を考えているうちに私情が入り込んでしまったためか、じりじりと背後に迫っていた扉が開け放たれていて、一人の青年がきょとんとした様子で佇んでいたことに気がつかなかった。

「はっ！！仲間！！？」
「すきあり！！！」
「フゴッッッッ！！！！？」
背後からかけられた姫の殺気に満ちた声に遅れを取るほどアナキスは甘くはなく、にらみ合っていた視線が外れたのを見逃すほど姫は甘くはなく、投げつけられた凶器―ただの本であるが―に気がつかないほどアナキスは甘くはなく、そして姫が自分に手を出すなんてつゆにも思っていなかった扉を開けた青年は姫に対して甘かった。投げられた本がのめり込んだかのようにして少し幼さが残る青年の顔に張り付いた。そこからくぐもった情けない声が漏れた。
「ヴィ、ヴィクトル！？どうしたのよ！？そんなに近くで本なんか読んだら目が悪くなるわよ」
「・・・うううぅ・・。・・・・・・・・・こ、こちらがご質問をしたい・・・かぎりです・・・」
そう言うとヴィクトルと呼ばれた男はゆっくりと張り付いた本をはがした。すっと通った鼻筋がものの見事に赤くなっていたが、それでも二人を見据えた青金石を思わせる光の強い碧眼と青髪が神聖な印象を与え、端正な顔立ちを一層際立たせている。

朝のお勉強　二

「わ、私はちょうどこの影武者に知識を授けていたところよ」
「・・・姫様の振りかぶった御姿が残像のようにちらつきますが・・・・」
「まぁ見ようによってはそう見えなくはないわね。言葉のあやってもんよ。・・・あっ、そう言えば、あなたはこの影武者に会うのは初めてだったわね。ちょうどあなたも報告会議から解放されたところだし、紹介するわ」
　まるで悪びれた様子もなく、姫はそう嘯いた。右手でアナキスの袖を掴み、空いた扉からアナキスが出て行かないようにしながら。
「この男がお兄様の影武者として2週間前から任務に就くことになったアナキスという人よ。話ぐらいは聞いてはいるでしょう」
「はい。・・・確か、手もとの資料ですとストリート育ちによる人間のまがい物で、我々が一生かかっても関わり合うことがないような生物だと聞いています」
「な、なんだとお前!?」
「・・・・・・・『お前』だと?」
　一瞬にして二人の間に火花が散った。人間誰しも馬が合わない相手がいるもので、その場合は微々たるものであるが一言二言会話を重ねながら相手のことを理解し、そしてちょうどよい距離感を取ることとなる。性格の不一致や行動言動の非共通性、あるいは生理的に受けつけられないといった先天的嫌悪感から生まれるものもある。異性同性関係なく起こりうるそれはお互いが譲り合うことで改善の余地があるものだが、野良犬と飼い犬は生まれつきの価値観の差によって交わることはない。お互い一目見合っただけで敵対心が沸きあがり、空気が冷めていくのが姫には感じられた。
「誰なんだよ、このキザったらしいやつは?」
「こら、失礼なこと言わないの。ヴィクトルはラインハルト国軍副

総司令官で今は私の警護をしている軍人さんなのよ」
「ラインハルト国軍副総司令官兼第一隊隊長のヴィクトル・L・ブランシェだ。祖国が今戦時中ではあるが、今は姫様の警護を任されている。以後、お見知りおきを願いたい。・・・といっても、お前に用など今後一切ないがな。むしろ覚えてもらわなくても結構だ」
　切れ長の両目から覗く鋭い視線をアナキスに向け、切り捨てるようにきっぱりと言い放った。まるっきり仲良くしようなどという態度は見られず、君主にだけ忠実なしもべ然とした雰囲気を漂わせている。
「けっ！！なんだこいつ！！気に食わねえな、全く」
「この、無法者が・・・。言葉に気を付けるんだな。ここは自由と平等の国でありながら、ラン教総本山がある聖都ジュラムという顔も持っている場所だ。戒律に触れるような暴挙はもちろんのこと、軽はずみの暴言もご法度ものなのだぞ。・・・・それはここで育ったお前が一番理解していることだろう」
「うるせえよ、俺に説教垂れるな。よそ者にあれこれ言われたくないね。・・・さっき戦争中とか言ったな。はは～ん、だからこの生意気娘がラインハルトと友好同盟を結んでいる俺らの国に逃げに来ているんだな。あっちでは姫様だがなんだが知らないが俺には全く関係のない話だぜ。さっさとこの手癖悪女を連れて自分の国に帰りやがれ」
　ピクリとヴィクトルの眉がつり上がり、投げつけられた本を持った手に血管が浮き出るのがアナキスの目にもはっきりと見えた。ちらりとそれに視線をやり、アナキスはおもしろそうに笑みをつくる。
「・・・ほ、ほら。何いがみ合ってんのよ。ヴィクトルは偉い人なんだからね。もっと言葉に気をつけなさい。すぐいきり立つのもあなたの悪いところなんだからね。お兄様はもっと寛容で気高くて、血の気の多いお人ではないのだから。・・・ヴィクトルも一応この影武者が今はお兄様となっているのだから、他人の視線がある時はお兄様として扱ってもらわないとだめよ。お兄様が影武者と知って

いるのは、ラインハルト側では私とヴィクトルとガサラム士官、そしてジュラム側はシルマール枢機卿だけよ。その人達しかいないときはアナキスと呼んでもいいけれど、普段から気をつけておかなくちゃ」
「・・・申し訳ありません、姫様。予想以上の無法者故に少し気分を害してしまいまして・・・」
肩に乗せられた重い鉛玉を下ろすかのようにヴィクトルは一息ついた。その表情からは、さきほどの殺気が氷解していくのが見てとれる。疲れを解きほぐすみたいに目がしらを空いている方の手で揉んでいる。
「いいのよ。あなたも今までの戦況で大変でしたものね」
「いえ、姫様のためならたとえこの身朽ち果てようとも本望でございます」
舌を出して拒否反応を示すアナキスをしり目に、ヴィクトルはちらりと手にした本に視線をやった。その背表紙には『できる！宝玉使い！』と書いてある。針で刺激されたように両眼を大きく見開き、聡明で後れを取らない副総司令官は言葉を失った。
「『宝玉』・・・。姫様、まさかこいつに『宝玉』の使い方をお教えするおつもりですか？」
「あら、いけないかしら。だってお兄様は高名な宝玉使いよ。いくらこの影が記憶喪失という設定でお兄様の役を演じるにしても、いささか無理な部分が出てくるでしょう。その懸念は少しでも省いておくことにこしたことはないわ。たとえそれが宝玉に関することでもね」
「・・・宝玉を習わせるとおっしゃいますか・・・」
ヴィクトルは沈痛な趣で姫とアナキスを交互に見やった。
「あん？なんだよ、宝玉って？」
先ほどからイスで船を漕ぎながら退屈そうなアナキスが間延びした声を出した。その緩みきった態度のアナキスに苛立ちを覚え、姫はかつを入れるようにアナキスの背中を思い切り叩いた。バチィン

！！ときれいにもみじを作ったであろう音とともに、図書室に悲鳴がこだまする。
「いってぇな！！！！何しやがっ―」
イスからまっすぐ立ちあがり、姫に抗議をしようとしたはずのアナキスが不可解な軌道を描きながら忽然といなくなった。瞬間移動でもしたかのように消えてしまったのだ。だが、次に聞こえてきた壮大な音によってすぐにアナキスの居どころはつかめた。テーブルの上に積み上げられた本の壁に頭から突っ込み、瓦礫の山が崩れ去るような豪快な爆音と何十年も使用されなかったことを連想させるほどの埃をまき散らしながら、真横に軽々しく吹っ飛んだのだった。壁際の書棚にぶつかるまで、その勢いは止まらなかった。密室の空間の効果もあって腹の底をあらう遠雷のような重低音が鳴り響いた。一瞬身を強張らせて小さな口をあんぐりと開けたままの姫は、突然の出来事に理解できず数秒固まってしまった。唖然とした驚きの表情には年相応の幼さが見え、いつもいたずらそうに何か企んでいそうな緋色の目がこの時ばかりは、右足を上げたままのヴィクトルを姿をまじまじと捉えていた。
「不用意に姫様に近づくな愚民が！！貴様、自分の立場が分かっているのか！？このお方は第１８代ラインハルト国王の第一皇女にしてその姫様であるのだぞ！！貴様みたいな穀つぶしの民がお目にかかることこそ敵わない地位のお方だ！！」
書棚からさらにバサバサと数十冊の本がアナキスの上に落下し、すっぽりとその姿を隠してしまった。唯一右手だけが本の山から突き出されているが、ぐったりと力なく垂れている。
「・・・・とんだ粗相をお許しください。兄上様の影武者とは言え、元はストリート育ち。一体何を仕出かすか分かったものではありません」
激昂を抑えるように胸を撫で下ろし、ヴィクトルはゆっくりと上げた右足を下した。その姿は演武のようになめらかで、血の滲む程の訓練を施されたことが容易に理解できる。舞う誇りに口を覆いな

がら、ヴィクトルは視線を姫に移した。
「それに、宝玉などこの者には宝の持ち腐れ以外の何物でもありませんよ。事実このように自分の身すら守れない者が宝玉を所有していたとしても姫様の足を引っ張るだけです。あなたは私がお守りいたしますゆえ、何も御心配はいりません」
さぁ、ここは空気が淀んでいます。外の新鮮な空気を吸いに行きましょう。
エスコートしながらヴィクトルは姫の手を取り、扉へと足先を向けた。
確か咲いたばかりのロードヒポキシスの花が西館の庭で見れるだろう。あるいは可憐な姫とよく似合う薄桃色のビスカリアが咲く南門近くの湖畔の方がいいだろうか。こんな男と一緒にいても姫様にとって何にも得な事などない。真っ白いキャンバスを黒い絵具で汚されるようなものだ。全く、ガサラム士官は一体何をお考えなのだろう。いくらジュラム国に世話になっているとはいえ、枢機卿の言いなりになってしまっては今後の立場も低級に扱われてしまいかねない。ここは私がガツンとひとこと提言して―
あれこれと考えを巡らしながら姫を誘導しようとしていたためか、それとも予想外の展開に頭が理解できなかったためか、手の中の暖かいぬくもりがするりと抜け出ていくのをヴィクトルは止められなかった。
「お、お兄様！！」
姫がヴィクトルの手を振りほどき、ゴミのように埋もれたアナキスに駆け寄った。
「姫さ―」
慌てて呼び止めようと姫に声をかけたヴィクトルであったが、地を這うようにして不気味に流れてきた重低音にかき消された。バサバサと鳥が羽ばたくような音を出しながら本の山から体を起こしたアナキスが口元をつりあげながら嗤っていたのだ。
「ふっふっふっ・・・・・ふふふふふ・・・・」

さすがの姫も突然のアナキスの変貌にビクッと身を強張らせ、テーブルの脇に退いた。
「ふふふはははは・・・・」
「意識はあったか・・・。頭でもおかしくなったか、愚民め」
「いや、そうじゃねぇよ。いいねぇ・・・あんたの上段蹴り、なかなか良かったぜ。貴族の連中なんざ、ただお遊び程度に木剣なんかを振って、飾りの武術に満足する奴らばかりだと思っていたぜ」
先ほどのヴィクトルの不意打ちをまるで意に介した様子もなくアナキスはすくっと立って見せた。白い埃が霧のように宙に舞う。
「誉めの言葉として取っておこうか。伊達に先陣隊の第一隊長など引き受けていないさ」
「そりゃそうだな・・・・。だってよ、この長剣もなかなかの代物だしな。イシュトバ地方の神剣とされるグラム・・・・か。あんたにしちゃあ、もったいないぐらいのいい剣じゃないか」
値踏みするように眺めては左右に持ちかえたりして、アナキスはいつの間にか手にした長剣をまるでおもちゃのようにもて遊んでいた。それを見たヴィクトルは、はっと自分の左腰に帯剣していた愛剣グラムをまさぐったが、いつものひんやりとした鋼鉄の感触を感じることができず、右手が宙を切っただけだった。
「貴様・・・・!!いつの間に」
ヴィクトルは抑揚の欠いた無感情の声を埃まみれの影武者へと投げかけた。やおらゆっくりと巡らした視線の先には痛がる様子もない白みがかったアナキスがケロッとした表情で本の上に足を乗せていた。
「切れ味よさそうだな。・・・どれ!!」
そう言うとアナキスは鞘から乱暴に取り出した神剣グラムを、目の前一面に散雑した本に向けてひと撫でした。軽々しくそして抵抗感など一切感じさせないほど神剣がなめらかに滑り、5、6冊ほどが本の機能を失った。それはまるで雨で濡れた土を薙ぐみたいに柔らかそうに見えた。

「ちょ、ちょっとアナキス！！なんてことするのよ！！知の共有物が台無しに！！」
まるで自分が傷つけられたように発狂しそうな叫び声を上げた姫であったが、ヴィクトルは制止の声でそれを遮った。
「姫様下がってください・・・。おい、おとなしくそれを返すんだ。宝玉と同じようにお前には扱えない代物だ。返さなければ貴様という人間が生きていたという証拠をこの世からきれいに消し去って―」
「ん、何？返せって？ほらっ、返すよ」
「なっ！！」
そういうや否やアナキスはヴィクトルの愛剣をゴミでも投げ捨てるかのようにほうり投げたのだった。

ヴィクトルに向かってではなく、姫に向かって投げたのだった。

わざとつけられた回転で薄暗闇の図書室の中でも刃先が妖艶に光り、不気味な鳴き声のような音をあげながらプリズムを作り出す。あまりにも突然な展開にきょとんとした姫はその光りに魅入られるように投げられた神剣をじっと見つめていた。回転が速すぎてまるで円のように見える。運が良ければ持ち手に当たって事なきを得るのだが、どうやって投げればあんな物騒に投げられるのか、擦り傷だけでは済まない程の速度を保ちながら姫へと吸い寄せられていく。足に溜めた力を爆散させ、弾かれるように体を躍らせたヴィクトルは右手を引きちぎように伸ばし、身を呈して姫を庇おうとし―
「いらねーよ、そんなもん。あっ、あと下噛むなよ」
アナキスの声が間近に聞えたような気がした。が、それが本当に聞えたかどうかヴィクトルに確認する時間などなかった。分かったのはわき腹に激痛が走ったことだけであった。
「ごぉっ！！」
肺に溜まった空気が強制的に吐き出されたような、言葉にならないくぐもった音が室内を満たした。アナキスが真横からヴィクトル

を上回る速度で距離を詰め、そのままひじ打ちをわき腹にのめり込ませたのだった。上半身を無理やり折らされた副総司令官は白目を剥き一気に顔を赤くした。そして―

「ぐっがはっ！！！！！！！！」

屈ませた身をばねのようにしならせ、伸びあがる力とともにアナキスは右拳を突き上げた。それがきれいにヴィクトルの顎を捕え、鈍い音と共に鍛え抜かれた副総司令官の体躯を軽々しく持ち上げた。ドア近くからテーブル脇に佇んでいた姫へ走り寄ってきたヴィクトルを、もう一度振り出しへと弾き飛ばしたのだった。派手に吹っ飛びドアごと廊下へと倒れ込んだ。

「ヴィ、ヴィクトル！！！！」

「なんだ、全く無防備かよ。・・・よっと」

失望のため息と、だが満悦な表情を残したまま突き上げた右手で先ほど投げた神剣を取った。まるで狂犬を扱う飼い主さながらに、傷つくことを怖れずに何でもないような雰囲気でアナキスは神剣を軽々しく手に取ったのだった。手品のように手中に収まり、一振り薙いで鞘へと納める。

目の前で行われた一瞬の早業に腰を抜かしたのか、へなへなとその場に座りこんだ姫は震える声でヴィクトルの名を呼んだ。だが、ヴィクトルはぴくぴくと反応するだけで立ちあがることもかなわない。

ぽっかりと空いたドアの外から差し込んでくる光が神剣を持ったアナキスの足元だけ照らす。そして、廊下にはいつの間にか騒ぎを聞いて駆け付けた護衛兵でごった返してるのがはっきりと見えた。

「や、やべぇ・・・！！いくらあんな奴でも貴族のお偉いさんだったか。あちゃー・・・」

これは死刑かな、とアナキスは頭の後ろをポリポリと掻きながら明日の朝ごはんのメニューでも決めるかのように平然とした口調で呟いた。ペタンと尻もちをついている姫がじっと見つめていたこともまるで知らずに。

ヴィクトルの復讐と宝玉

昼食を済ませて向かいに座ったシルマールを俺はちらりと見たが、にこりとほほ笑みを返すだけで何も返事を寄越さなかった。全く不気味な女だ。目の前のフィレ肉と色とりどりの季節ものの根菜スープ、そして白身魚のムニエルという御馳走には一瞥もくれず、じっと俺の顔を覗き込んでくるだけだ。顔に何かついているのか。いや、これはもしや・・・・俺に惚れたな。

天頂も過ぎた頃、朝食と同じように食堂のイスに座りながら、シルマールにウィンク一つしてみせた。すると応えるようにクスッと笑顔を見せた。鼻の下が伸びるほど美しいシルマールを見ながら、俺は頭の片隅で先ほどの一件のことを思い返してみた。キザ野郎をぶん殴ったことに対して、まぁ死刑とまではいかないまでも、あのチビガキが口うるさくお兄様像とやらをまくしたてるのだろうと思っていたのが、予想に反して注意一つしただけだった。ドアの外に集まった野次馬達のせいで、あまり公に怒れなかったのだろうか。それとも少しは俺のすごさを見直してくれて態度が寛容になったのだろうか。いや、あのわがまま娘に限ってそんなことはまずないな。図書室は本がおもちゃ箱をひっくり返したように荒れ果て、閲覧用のテーブルもイスもひっくり返り、ドアも蝶つがいごと吹き飛び、さらには副総司令官をノックアウトさせたにも関わらず、あのチビガキは午後からの本城の定例会議に出席するとか言ってガサラムというおっさんと一緒にあっさりと出ていったのだ。キザ野郎の介抱もメイドに任せて、自分は労りの言葉もかけやしない。薄情な女だ。・・・まぁ、打ちのめした俺が言うのもなんだが。

窓の外から、姫とガサラムそして数人の下女を乗せた馬車が本城へと向かう音が聞こえてくる。その音もだんだんと遠ざかっていき、食器のたてる音にかき消されていく。

「ほどほどにしてね、アナキス君。今のあなたは姫様の兄上様、つ

まり一国の皇子様なのだからもう少し気品と自覚を持って行動しなくちゃいけないわよ。いくら頭にきたからって決して手を出してはダメ。これからそのようなことは何度でも起こりうる可能性があるのだから、我慢しなくちゃ。ね」

甘い猫撫で声が、無意識にテラスの方を見てしまっていた俺の思考をかき乱した。できの悪い生徒を諭すような、それでいて楽しげな口調をにじませながらシルマールに声をかけられたのだった。真紅のローブを頭からすっぽりとかぶり、シミ一つ見当たらない真っ白なショールを肩にかけた礼服に身を包み、そして胸には金色に輝くロザリオがその存在を主張するかのように揺れていた。

聖職者たる身なりからは仰々しい堅苦しさが付きまとってしまいがちで、つい姿勢を正してしまわなければという厳かな態度になってしまうのが常であるが、それがさらに敬虔なラン教徒とあってはみだりに戒律などをないがしろにはできない社会的風潮がジュラム国には流れている。俺はそんなもの気にしないが、聖職者は自然と敬意を持って扱われるのだ。その中で枢機卿となれば法王並みの地位と権力を持ち、畏敬と尊敬のまなざしの対象になるということは言うまでもない。つい最近では、ラインハルト国とハバリアント連合国との戦争についての保安維持声明と、ジュラム国軍第二次戦闘配備発令および強化宣言を自ら公開演説したばかりだ。つまり、枢機卿の発言には国を動かせるほどの重さがある。ジュラム国の国教であるラン教の信者にとってはジュラム皇帝の言葉よりも優先順位は上回ると声高く叫ぶ者もいる。

だが、このようなことはシルマール枢機卿だけであって、これまでの歴史から比較しても例外中の例外と呼べるだろう。それは、枢機卿の美貌が大きく関係しているのだ。ストリート時代に見た参拝者の服装と同じものを着ているのだが、着る対象が違うだけでこんなにも変わるものなのだろうか。一流の彫刻家がつくりだしたように目鼻がきれいに整っていて、絹のように艶やかな栗色の巻き髪はきっとなめらかに指の間を滑るだろう。大きく見開かれた鳶色の目

は生きとし生けるものすべてを愛でる暖かさが伺え、老若男女問わず崇め立て祀られるほどだ。城下町を視察するものならば、その姿を人目見ようと街は人でごった返してしまい、身動きが取れなくなる。おそらく今まで見た女性の中でトップクラスに入るほどの美しさと言えよう。見ているだけで目の保養になるというのはこのことを言うのだろうか。

「別に頭にきたわけじゃねえ。ただあいつの態度が気に食わなかっただけだ。貴族が偉いという典型的な態度がな」

しかし、目を見張るところはそれだけではなかった。この枢機卿たる人物の服装は全くと言っていいほど聖職者としての規則を逸脱しているのだ。真紅のローブは他の聖職者と同じなのだが、そのローブの肩の上部分が露わになっており、さらには収まりきらない胸がちらりと顔を覗かせている。ショールも肩にふわりと引っかけるだけで、まるで防寒対策の機能を果たしていない。およそ規定範囲外なほど肌の露出が多い礼服を身に纏った枢機卿は、どちらかと言えば娼婦のように見えなくもない。

「それに俺は悪くねえよ。あのキザ野郎がいきなり仕掛けてきたんだ。やられたらやり返す。これは俺のモットーでね・・・っと！！」

シルマールの目の前に置かれた手つかずのフィレ肉にフォークをぶすりと刺しながら、アナキスは事もなげに言い放った。肉汁があふれ出て、シルマールのみずみずしくなめらかな手触りを連想させる鎖骨肌に飛び散った。

「あなたの言い分は分かるわ。確かにヴィクトル司令官にも改める部分はあるでしょう。だけど、あなたの口の聞き方が今回の引き金となっているのは火を見るよりも明らか。少しは反省してもらわなくちゃ姫様もお困りになるから、考えて欲しいのよ」

肉へと伸ばしたアナキスの手にそっと両手を添えて、シルマールは優しく語りかけてきた。ぱっくりと開いた胸元からなのか、それともふわりと空気のように揺れる栗毛色の巻き髪からなのなかはっきりと分からないが、ローズの甘い香りがほのかに漂ってくる。聖

職者がそんな破廉恥な服装着てていいのかよと言いたくなりそうなほど、露出の多さに目のやりどころがなくなってしまう。思わず俺はシルマールの両目を見つめてしまった。吸い込まれそうなほどきれいな鳶色のその両目が、なめるように見つめ返してくる。さらにシルマールはイスから体を少し浮かして身を乗り出し、テーブル越しに近づいてきたのだった。豊満に膨らんだ胸の上部分がますます露わになり、そして柔らかそうにたぷんと揺れる。

「少しずつでもいいから勉強も頑張りましょうね。姫様を悲しませるようなことはしてはいけないわ。アナキス君に会う前はそれはもう塞ぎ込んでしまっていたらしくて、傍から見ても痛々しいほどだったのだから・・・」

細い指先を滑らすようにして俺の手首、腕、そして肩へと伸ばしていく。くすぐったいが、どこか嬉しくもあり、なんとも言えない感情に満たされていく。あうあうと口が無意識にパクパクと動き、呼吸がうまくできない。視線すらもこの枢機卿から逸らすことができなくなっていた。そして、どういうわけかシルマールのフィレ肉に差した右手には想像以上にずっしりと重く、そして柔らかな感触が触れているではないか。動かそうにも動かせないほどすっぽりと挟まれてしまったのだ。ちょっと待て、これはつまり・・・。

そして淫美な枢機卿は俺を見ながら、胸へと垂れていく肉汁を舌で舐めとった。転がる舌先が何度も鎖骨と胸の間を往復しているのを見ていると体の奥底がうずき出すのが感じた。クスッと笑顔を向けられさらに体温が上昇し、這わせられた手が上へと伸びてくる。頭の中がぐるぐると回り始め、そして―

「お、おい、メイド！！城内を案内しろ！！」

メイド控え室の入口に立っていた小柄なメイドに俺はなんとか視線を移して叫んだのだった。こちらから椅子が２０個ほど離れた所に控えていたためシルマールとのやりとり聞かれなかっただろうが、上ずった声はごまかせなかったに違いない。予想以上に食堂内に反響した。

「は、はひ！！」
　控えていた3人のうち、小柄なメイドが反応して返事を寄こした。突然の指名に緊張したのか、それともウトウトしていたところを怒られたと思ったのか、そのメイドの返事も裏返っていた。過剰に絞り出された素っ頓狂な返事にも眉ひとつ動かさない背の高いメイドと、つり目で見るからに気の強そうな平均的な背丈のメイドに囲まれながら、小柄なメイドは気をつけの状態で固まったいた。小柄というよりはむしろ、うぶな少女と呼んだ方が適切なくらいだ。
「声が上ずってるわよ、声が」
「だ、だって急に話しかけられるんだもん」
「ほら、返事したんだからお前が行きな」
「嫌なら私が行こうかしら。ラインハルト国皇子様と城内を回れるなんて、まるで夢みたいよ。もしかしたら目をかけていただいて、皇子様専属メイドに昇格できるかも」
「ええ！？専属メイド！？」
「そうねぇ・・・。お給料は今の何十倍にも上がり、お召し物もそこらへんの貴族よりも豪華なものを着ることができて、お食事も皇子様とご一緒できるかもしれないわ。そしてそのまま夜のお供も・・・」
「そんな！！夜のお供も！？わ、私できるかな・・・。そんな経験ないもん」
「あら～。やっぱりまだまだお子ちゃまね。あんたには荷が重すぎるわね。×××なことや、×××なことあなたにはできるかしら」
「×××なこと！？」
「そうよ、×××よ。そしてそのままゆっくりと撫でまわされて、×××へ・・・。そして―」
「・・・こら、勝手な妄想を広げるな」
「何ひそひそ話してるんだ。さ、さっさとしろ！！」
　三人のメイドが顔を寄せて何やら話し合い、小柄なメイドが顔を赤らめているのも知らずにアナキスはシルマールの視線から逃れる

ようにして催促した。
　恨めしそうにシルマールは俺の顔に手を這わせるのを止め、自分のイスに座り直した。動かせなった手が解放されていくのと同じように残念な気持ちもなくはなかったが・・・。フォークを持った手にはびっしょりと汗をかいていた。
「待って、アナキス君。城内を見学するなら、せっかくだからケフィーちゃんにお願いしようかしら」
「ケフィーちゃん？犬でも飼ってんのか、あいつは？」
「そうじゃないわ。姫様専属のメイドさんで、唯一姫様のお付き人役としてラインハルト国から来て下さった天使ちゃんよ。今までお使いに行ってもらっていて紹介できなかったけれど、先ほど帰って来たばかりだからちょうどいいわ」
　人差し指を口にあて、背後から聞こえてきたメイドらの残念なため息を楽しむかのようにシルマールは悪戯っぽくウィンクした。そのウィンクひとつにまた鼓動が高まってしまいそうになったので、俺はぶっ刺したフィレ肉を口の中にほおりこんだ。柔らかい感触が今度は口の中で再現された。
　強いて肉に専念しようとしていたため、どちらかといえば犬はあなただけどね、というシルマールの付け足した言葉はアナキスの耳には届かなかった。
　いらっしゃいな、と手招きを加えて食堂奥のメイド控え室に枢機卿は声をかけた。その声を待っていたかのように黒色のメイド服を着た黒髪黒眼の少女が姿を現した。肩の上で短く切りこまれた黒髪のせいであるのか、頭に付けたホワイトブリムとエプロンの白さが際立ち、清潔感が漂っている。
「お久しぶりです、皇子様。・・・といっても、御記憶を無くてしまっていて私のことはおそらく覚えていませんよね。改めてご紹介させていただきます。お嬢様専属メイド兼護衛も務めていますケフィーです。貴族の生活様式やマナーなど、もう一度覚えなければならないことがたくさんあって大変ですが、私も皇子様の御記憶がお

戻りになるよう全力でお手伝いいたします。どうかよろしくお願いします」
　にこりと人懐っこい笑顔を見せた少女が、銀のトレイを前で組んだ両手で持ちながら挨拶をした。王族や王宮に使える人間などあの三人メイド衆や副総司令官みたいに堅苦しく格式ばった応対のするやつばかりだと思っていたが、このケフィーってやつはまともに話が通じそうな感じがした。まぁわがままお姫様やこの淫らな枢機卿のような悪い例があったからこそ、このような普通な人間に会うとほっとしたのもあるが。
「私のことはケフィーって呼んでください」
　全身から純粋オーラ全開じゃねぇか。まぶしくて目が開けられないぜ。全く、あのチビガキもこいつみたいに少しは相手に対して敬意ってものを持ってもらいたいもんだぜ。
　さっきまでバクバクと脈打っていた心臓も今ではケフィーの和やかな雰囲気で落ち着きを取り戻し、手を上げて返事をしようと思ったアナキスであったが―
「っ！！！ううぅ・・・・。いったぁ～い・・・」
　ゴンッと鈍い音を立ててケフィーがよろめいた。直角にお辞儀をしたまでは良かったものの、目の前のイスの背もたれに壮大におでこをぶつけたのだった。まるで予想もしていなかったことにアナキスは手をあげたまま固まってしまった。
　おいおい、そんなことするやつなんて見たことも聞いたこともないぞ。
「こいつもまともじゃない・・・のか」
　また変なやつが出てきたと思いながら、俺は上げた手をそのまま頭に持っていきガシガシと掻いた。そして、ローズの甘い香りが自分の手にもついているということに気づいて、またあの感触を思い出してしまった。

ヴィクトルの復讐と宝玉　二

「全く、なんなんだよこの館にいる人間は。口うるさいチビガキにしろ、あのエロい枢機卿にしろ、まるで役に立たないキザ野郎にしろ。それで挙句の果てには天然娘か・・・」

無意識に深いため息があふれ出てしまい、思わず途中で足を止めてしまった。食堂を出てから4回角を曲がって2回階段を上がり、さらに2回角を曲がって長い廊下を歩き、今度は数段下りて2回角を曲がって、そしてまた長い廊下を歩いて・・・。一体どれほど歩けば自分の部屋に着くんだよ。城内の見学も兼ねつつ俺の部屋に向かうと言っていつもと違う順路を歩いているのだが、未だにこれといった展示物や迎室などは目に入らず、平民と王族との格差をこれみよがしに感じさせる所を案内されていない。これじゃあ部屋に着いたころにはまた腹が減るぞ。俺の身長程の高さにはめ込まれたガラス窓から外を見ると、雲ひとつなくそこはかとなく天気が良い。こんなに天気が良いのにまた部屋にこもって勉強をさせられるのかと思うと、ずんと気が重くなってくる。このままガラス窓からとんずらするのもアリかもしれないな。歩き周りすぎてここが一体何階なのか全く見当がつかないが、窓から下の景色を見ればその高さが判断できるだろう。ん、ちょっと高いな。なんで窓なのに俺の目線の高さにあるんだよ。これじゃあ景色どころか敵襲が来ても分からないじゃないか。

今いる階の高さを確認しようと窓枠によじ登ろうと足をかけ――。

「どうかなさいましたか、皇子様？」

アナキスの目の前を歩いて先導していた姫専属メイドのケフィーがくるりと振り向いていたのだった。

やべっ！！こんな格好見られるなんて、ただの変態じゃないか！！

短髪黒髪、黒目、そして黒と白を基調にしたメイド服を隙なく着込んだ黒色少女がきょとんとした表情で、窓枠に右手と右足をかけ

たアナキスを見つめていた。
「皇子様、何をしておいでですか？いかにもお空へ羽ばたくような御格好で？」
「あっ・・・いや、お空・・・・？あ～その・・・・あ、あれだよ！！なんだか窓を見ているとな、こういうことがしたくなってな・・・・。無くした記憶と何か関係があるような、ないような・・・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱりないよう、な・・・・」
尻すぼみの声になってはっきりとは聞き取られなかっただろうが、絶対怪しまれているに違いない。窓から飛び降りるなんて一般市民でも狂人しかやらなさそうな奇怪な行動を、一国の皇子がやるわけがない。頭にクエスチョンマークが浮かんだ疑問の目つきで見返してくるのが耐えられない。だが、ここはもうこのまま押し通すしかない。
だが、意外にもケフィーはポンと手を叩きながら明るい表情をしたのだった。
「あっ！！あの時ですね！！幼少の頃のお嬢様がおねしょをしたのを皇子様がからかいなさって、お嬢様に追い詰められて窮地に立たされた際に6階の窓から飛び降りた時の記憶ですね！？」
実際にあったのかよ！！しかも6階から飛び降りたんかい！！ってか、窮地に立たされて逃げ出す次期国王ってどうよ！？
「あの時はもっと、死に物狂いで逃げ回っていましたよ。もっと大胆に体ごと乗り上げれば何か思い出すかもしれませんね。私もふつつかながらお手伝いいたします！！」
おい、窓開けるなよ。うへ、結構高いじゃないか！！巡回してる警備隊の顔が判別できないくらいちっちゃいぞ。鎧を着て訓練している隊なんか、灰色のうごめくダンゴ虫みたいじゃないか。
手際よく窓を開けた隙間から生暖かい風が廊下に流れ込み、薄手のシャツと腿の部分がゆったりと膨らんだズボン、そして肩にかけた赤いマントがびっくりしたようにはためいた。じゃじゃ馬のように暴れるマントを押さえながらも予想以上に高い所にいると分かり、

アナキスは鳥肌が立った。
「実際にここから身を乗り出して、記憶が元に戻るかどうか試してみましょう」
「いや、ちょ、やっぱりいいや！！何も思い出さないしむしろ恐怖心が呼び起されてくるだけだ！！」
　っておい押すな！！人の話を聞けよ！！ぐいぐいと背中を押してくるケフィーの腕に全力で抵抗し、そして必要以上にしつこいケフィーの頭をバシッと引っ叩いた。キャッと小さな叫び声をあげたケフィーの脇をすり抜けて廊下に舞い戻り、そしてさっさと窓を閉めて、何とか事なきを得た。
「痛いですぅ～・・・」
「馬鹿かお前、ほんとに落ちちゃうだろ！！めちゃくちゃ高いじゃんか！！押すなっての！！」
「いわゆるショック療法ですよ～」
「ショックどころじゃないわ！！死ぬわ！！」
「皇子様はこれしきのことでは死なないのですよ～」
「いやいやいやラインハルト国の皇子はそんな期待に応えられる程の超人だったのか！？だったら俺はそんな役なんかそもそも引き受けたりなんかしな・・・・・・・・あー・・・・やべ・・・」
　途中で言葉を区切り、アナキスはしまったと内心呟いた。
　だが、叩かれた頭を両手で押さえながら涙目のメイドは全く意に介した様子も見せていない。良かった。こいつの天然もこういう時は役に立つな。
「そ、それよりも一体俺達は今どこにいるんだよ。古いジュラム国の文献資料とか城外視察書とか宝物庫とか展示物とか案内してくれるんじゃなかったのかよ。そっちの方がもっと記憶を蘇らせるきっかけになると思うんだけど。ずっと廊下を歩いているだけで何もそれらしき部屋も通らなかったし」
　話題を皇子の記憶の話に変えて失言から注意を逸らそうとし、そしてさらに先ほどから疑問に思っていたことを質問してみた。

「それがー・・・。そのですね・・・」
するとケフィーの顔色が急にさーっと青くなり視線も泳ぎ始めた。心なしか冷や汗もかいてるように見えるが、まさか・・・・。
「・・・ま、迷っちゃいました」
てへへと頭をこつんと叩いたケフィーはペロッと舌を出して見せたのだった。

マジかよ!!なんなんだよこいつは!!

「もういい!!自分で見て回る!!もうついて来んな!!」
「ああ～、皇子様。待って下さいまし～。一人にしないで下さい～」
全く役に立たないメイドだ。こんなやつが姫専属メイドをやっているなんて不思議なくらいだぜ。じゃあ俺はあてもなくフラフラ歩いていく馬鹿の後ろを同じく馬鹿みたいについていただけなのかよ。くだらない!!まぁ、勉強させられるよりましだが、午後はあのチビガキがいないからサボって昼寝でもしようと思っていたのに、とんだ計算違いだ。
「わ、私もつい昨日このラインハルト城別棟の客室用館に着いたばかりなので、この館のことはまだすべて把握しきれていないのです～」
「何も知らないお前が俺を案内できるはずないじゃないか。よくもまぁそんな役目を引く受けたな」
今度は反対に早歩きする俺の後ろをケフィーがついて来る。離されないようにほとんど小走りになりながら必死についてくるのが足音で分かるが、そんなこと俺の知ったことじゃない。このままこいつを巻いてどっかの部屋で昼寝でもしてやろう。
「そ、それに・・・・お、皇子様とお久しぶりにお会いすることができて気持ちが高ぶってしまいまして。・・・後、それとは別にいつもの皇子様と性格がまるで別人のようなので戸惑ってもいますが・・・。御記憶を無くしなさっているのですから、当然ですが・・・」

どきっと痛いところつかれて俺はさらに速度を速めた。そんなこと言われても元の皇子様とやらがどんなやつなのか知らないから真似の仕様がねえんだよ。

「皇子様がラインハルト国を3年前に出立なさってから、ずっとお嬢様も御気分がすぐれなくなってしまって・・・。お嬢様が御心を許せる唯一の肉親が居なくなってしまい、お嬢様専属近衛兵である私達も自分のことのように苦しんでいました。誠心誠意尽くしてもお嬢様の相好を崩すことは敵いませんでした。皇子様が自国の戦況を慮って友好国のジュラムに帰着なさったとお聞き申し上げた時は、それはもう一日も早く私もジュラム国に行って姫様の安堵した御顔を拝見したいとばかり思っていました。ですが、一体どのような祟りが貴方様に降りかかったのでしょう、今までの記憶というものをあらかた無くしてしまったと・・・。きっと宝玉のお使い方もお忘れになってしまったのでしょうね。図書室の『できる！宝玉使い！』シリーズがごっそりなくなっていると聞きましたから。たとえそれでも貴方様にお会いできたお嬢様の御気分は、3年前と比べますとそれはそれは見違えるほど回復なさっていて、私も心から安心し―」

俺は足を止めた。軽い衝撃と共にケフィーが俺の背中に当たる。

「きゃ！！ど、どうなさいましたか？そんな怖い顔をして・・・・お通じがよくないのですか」

首をかしげながら覗き込んできたケフィーが心配そうに言った。

「なんでいきなり便の話になるんだよ！！そういう前フリか何かあったか！？・・・・・・お前に、いくつか聞いておきたいことがある」

「はい。なんなりと」

後ろを振り向いてもう一度ケフィーと向かい合うと、そのメイドはニコリと屈託のない笑顔を見せた。肩のところで短くそろえられたショートヘアがさらさらと流れるように揺れるのを見ると、俺はそのメイドの華奢な肩に掴みかかって声高に叫んでしまいそうになった。俺はお前の知っている皇子じゃないんだ。俺はつい最近、不

正に雇われた影武者なんだ、と。その衝動を抑え込むために俺はまず深呼吸をして頭の中の酸素を入れ替えた。真実を言ってもいいのだが、厳重に釘を刺されているため、今度こそ消されるかもしれない。あんなわがまま娘やエロ枢機卿にしても、権力は半端なくもっているだろう。一人のストリートチルドレンを消すことなんて容易いことだろう。・・・・いや、それよりも聞きたいことが山ほどある。皇子が3年前に出て行っただと？皇子は今国家間を外遊していて、またすぐに戻ってくるとあの枢機卿が言っていたじゃないか。そして専属近衛兵だと。護衛も兼ねていると聞いただけで近衛兵であるとは聞いていないぞ。近衛兵なんて国内の、主に城内を守る最高部隊じゃないか。こんな地に足もつかないようなふわふわしたやつがか？こいつはあのチビガキのただの専属メイドじゃなかったのかよ。それに宝玉という言葉だ。ヴィクトルも確かその単語を言っていたな。俺に習わせるのには無理があると・・・。宝玉って一体なんなんだ？一種の戦闘術か何かかなのか？それに―

アナキスは体が冷えていくのを感じた。先ほどの窓はしっかり閉めたはずなのに、背筋の当たりがゾクッとした。冷水を浴びせられたような感覚が体中を走る。

あいつが心を許せる唯一の肉親って―。

俺はとりあえず頭の中で聞きたいことを一つずつ整理することに努めた。廊下の両端がはるか向こうに見えるほどのど真ん中で俺はいやにフカフカな絨毯に視線を落とし、たっぷり2分は考えていただろう。

――だからなのだろうか、俺は全く気付かなかった。目の前にいたはずのケフィーが姿を消してしまっていることを。そして、背後に立っていた副総司令官が拳を振り下ろそうとしていたことを。

ヴィクトルの復讐と宝玉　三

何かが頬を掠めて風を切り、ぴたりと右肩の上に止まった。頭上から振り下ろされた物体を横目に見て初めて俺はそれが人間の拳だと分かった。強く込められて小刻みに震える衣ずれの音が右の耳朶を打つ。

「こんなところで何をしている」

「・・・・・・どっから湧いて出てきた・・・キザ野郎」

一瞬の出来事に理解が追いつかなかった。一体何が起こったのだろう。振り下ろした拳の殺気などまるで感じることができず、ましてや気配すら察知することができなかった。こんなに長い廊下を気付かれずに接近するなんて、よほど熟達した暗殺者ぐらいしかできやしない。いや、玄人暗殺者でもってしても難しいだろう。隠れる場所もないこの廊下なら、子供ですら足音や違和感で振り返ったりするに違いない。それをこいつはいとも簡単に・・・・。本当にそれこそ、湧いて出てきたのだろうか。

声こそ平常心を保っていたが、心臓はバクバクと脈打っている。嫌な汗がじわっとシャツにへばりつく。

「私の質問に答えろ、影武者。ここで何をしている」

「・・・・・もう顎の怪我はいいのか。軽い脳震とうだけでは済まないほど、きれいにとらえたからな。あの後のお前の姿と言ったら、打ち揚げられた魚みたいにピクピクしてたぜ」

俺は返事の代わりに体をわざとひくつかせて答えてやった。怒ってやがる。さらに右拳に力が込められて腕が震えるのが分かる。

「言葉も通じないのか、愚民」

「ベットで寝てろよ、お飾り野郎」

突然の出現に気が動転してしまったが、ヴィクトルをからかって幾分か緊張した体を解きほぐすことができた。どんな方法で俺の真後ろに付けたか分からないが、直接聞くなんて癪だ。こいつに下手

に出て質問するなんて、絶対にしたくない。得意気に答える顔が頭に浮かぶ。まぁ、こいつの笑ったところなんて見たことないが。
そんなことよりも、あの姫専属メイドのケフィーってやつは一体どこにいったのだろう。
先ほどから視線だけ巡らせて周囲を確認しているのだがケフィーの姿がどこにも見当たらない。まさかあいつも俺に気づかれずに背後に回っているのか。それほど俺は注意散漫になっていたのだろうか。
「ケフィーには席を外してもらった。人前で貴様を皇子呼ばわりなどしたくないのでな」
なるほど。言葉も必要とせずに威嚇だけで指示ができるなんて、さすが副総司令官。まるで牧羊犬みたいだぜ。って人の心を勝手に読むな。
「私はまだ、貴様が祖国の皇子の影武者の役を任されていることなど認めていない。下賤な穀つぶしが由緒ある姫様の御前で狼藉を働きやしないか常に目を光らせている次第だ」
「そんなに見つめられると俺照れるな～。ほどほどにしてくれよ」
「・・・・もう一度聞こう、ここで何をしている」
ユーモアのかけらも感じられない、抑揚の欠いた声がすぐ背後からまとわりつくように聞えてきた。全く面白みのないやつだぜ。まるで無機質な機械のようだ。
「ふん・・・。何ってお前、あのケフィーってやつに城の案内を頼んで周ってたところだよ。周っていると言うよりかは、迷っていると言った方が合ってるかな。・・・・・・・ん？」
依然としてヴィクトルは俺の右肩から腕を突き出したままの状態で、じっとして動かない。傍から見れば後ろから肩に手をかけられたような変な格好に見えるだろうが、幸いにもこの長廊下には俺らの他に人の気配は感じられない。いや、実はケフィーも近くに控えていて俺らのことを見ているんじゃないだろうか。いや、もしかしたらケフィー以外の他の誰かがいるんじゃないだろうか。気付かな

いだけで、俺らの様子を遠巻きに窺っているんじゃないだろうか。いたとしてもヴィクトルが呼ぶ『影武者』という言葉がおよばないところに身を潜めているに違いない。・・・身を潜めている？一体どこに？この、何にもない長廊下の一体どこに？それすらも分からないほど俺はこの2週間のうちに、ストリート時代に培ったものをすり減らしていたのだろうか。

悶々と頭の中で考えが巡ってしまったが、ヴィクトルの右手にきらりと光る物を目にして、俺は思考を中断した。手のひらの中にすっぽり収まるほどの大きさで握りやすいよう指の形に凹凸が付けられているそれは、自ら発光しているかのように淡い光に包まれている。ともすれば、じっと見つめてしまいそうなほどきれいな珠だ。

「気づいたか？これが宝玉だ。内々に訓練された者しか扱うことが許されていない小型戦闘武器であり、ラインハルト国が独自に開発した最終兵器だ」

そういうとヴィクトルは握った手のひらを開き、手を返して宝玉を見せてきた。いやいや、ちけーよ。まず腕をどけろよ。未だに肩から伸ばしたままだったので焦点がうまく合わなかったが、それでもその宝玉とやらは生きているように明滅していた。透明なガラス珠の中を胎動するように、ゆっくりと無数の光が蠢いている。規則などなく、各々の光がその意志に基づいて活動しているようだ。宝玉は、柔らかいパンをギュッと手で握ってその形を形状記憶したような少し細長い流線形を描いていたが、どこかの美術館などで展示されればそれなりの存在感はあるだろう。

「これが、宝玉ってやつか。・・・・お高そうだな」

「これを貴様などに与えるなんて、姫様もどうかしていらっしゃる―」

「あん？あのチビガキが何考えてるかなんてどうだっていいんだよ。俺の知ったことじゃないね。―それよりも、お前さっきそれが小型戦闘武器だとか何とか言ったな？・・・こんなちっちゃいガラス玉がか？これで殴ったりするのかよ・・・。確かに痛そうだが独自に

開発するもんじゃないだろ、こんなもの」
「姫様は祖国の戦争で気が滅入ってしまっていただけだ。そうでなければこんな下郎をお傍に控えさせるわけがない―」
「何ぶつぶつ言ってるんだよお前。俺の華麗な一発が顎じゃなくて頭にきたか？使い方を教えろって言ってんだよ」
「天真爛漫で飾らないお方であったのに、御心を閉ざしてしまったのは私の不出来でもあっただろう。お傍にいられなかった私の責任でもあっただろう。だが、それでも私は最優先に姫様のことを―」
「おい、こら！！人の話しを聞けよ！！会話してやるからお経みたいに呟くな。―ってかお前いつまで俺に張り付いてるんだよ。気持悪いから離れろよ。俺が初めにここに居たからお前から離れな」
顔を横にして俺は抗議をしたが、それでもヴィクトルは微動だにしなかった。何なんだよこいつは。待てよ・・・もしかしてこいつ、キザ野郎じゃなくてキザ女郎なんじゃ―
「宝玉の使い方か・・・。そうか、姫様はまだお前に使い方までは教えていないのだな・・・。いいだろう・・・特別に教えてやるっ！！」
やっと会話が成立したと思いきや、ヴィクトルは伸ばした右腕を曲げて俺の首に巻きつけたきたのだった。やっぱりこいつ男に趣味が！！と鳥肌が立ったが、抱きつかれるにしては力がこめられ過ぎている。というか、確実に締められてるじゃん。男に興味はねえ、と咄嗟に喚いたが、全く聞く耳持たない。絨毯から体が浮く。そのまま締め上げられるのかと思ったが、突然重力を感じない違和感に襲われた。俺の体重はそれほど軽い方じゃないが、ヴィクトルは子供を扱うように軽々しく投げ飛ばしたのだった。だが、投げ飛ばされたと分かった時にはもう既に遅かった。

窓めがけて放り投げられたのだった。

雷が落ちたようなガラスの砕ける音と、庇いきれなかった腕や顔

の節々が破片で裂け、激痛が走る。そして両手で覆った隙間から、ヴィクトルも窓から身を躍らせたのが見えた。文句のつけようもないぐらいのんびりとした良い天気が目の前いっぱいに広がっていた。

本日二度目の不意打ちは死亡フラグの紐なしダイブだった。

ヴィクトルの復讐と宝玉　四

「えーっと、宝玉っていうのはね・・・・・。その・・・小型戦闘武器で・・・宝玉内に注入された血液を媒体として、高密度に圧縮された流動性硬化炭素と同調し・・・・次に・・・・・・あっ、まず手に持って・・ちが、指先で握って・・・脳内のニューロンと同期する必要があるのね・・・・あるいは電気活動によって細胞レベルでの発作を開始する方法もある・・・か・・・・。そして活動電位を急速に、連続的に発生させて放電を行う。次に、同期された宝玉内の流動性硬化炭素が反応を起こし・・・うん、その前に、抑制を乗り越えるためにＧＡＢＡ抑制作用の低下を引き起こさなければならないのね・・・・。意外にプロセスが込み入ってるわね・・・。ニューロン発火の増殖による細胞外カリウム濃度の上昇でも抑制作用の低下を引き起こすことができる・・・。そうして抑制を乗り越えて放電を起こした時に、ニューロンと同調された流動性硬化炭素にも発火が伝播するわけね。視床を経由して体性感覚と連結し、発火させた流動性硬化炭素にその感覚器を模写させる。そうして宝玉を意のままに操るというわけね・・・・。ふむふむ、なるほどなるほど・・・」

分かっているのか分かっていないのか判別がつかない独り言をぶつぶつ呟きながら、姫は手に取った『できる！宝玉使い！』を読んでいた。

「何だって？自分だけ分かったようになるなよ。ま、俺はサボれるからお前が読書に集中するのは心からウェルカムだがな～」

にやりとニヒルに口元を歪めたアナキスは数冊の本を立てながら、向かいに座っている姫に向かって言った。等間隔に並べた本を指ではじき、パタパタと倒して遊んでいる。

「こら、ちょっと何してるのよ。さっき決めたでしょ。神学とラインハルト古代史を覚えなさいって。何度言ったらその詰まっていな

い脳みそに今日の課題を叩き込められるのかしら」
「悪かったな。その代わり俺の頭には夢と希望がたっぷりと詰まってるぜ」
「ミミズとゴミくずの間違いじゃないの」
「お前っ！！」
「揺らさないでよね！！お兄様はそんなにすぐに、いきり立つような御人ではないわ。寛大な御心と慈悲の精神でもって、いつもゆとりある行動を重んじているのよ。・・・・う～んと、とりあえず・・・この宝玉が一個あるだけで、使い方によっては一個旅団に匹敵する力を発揮する・・・だって」
「まじかよ！！かなりの軍事武器じゃねぇか！！そんなに宝玉ってすごいのか！？」
「えっ・・？ええ、そうよ！！だから言ってるじゃない。お兄様はものすごく高名で宝玉の扱いにも長けているって」
「・・・ところで、旅団ってどれくらいの人数規模なんだ？２０人？３０人？」
「えっ！？え～っと・・・２５に・・・・ん・・・？」
「・・・・間とったな・・・」
「そ、そんなことよりも、あんた全然進んでいないじゃないの！！」
「今話をすり変えただろ。・・・・・教科書反対だぞ・・・」
「・・・・・・・・・・さらにラインハルト国史追加ね」
「うぐぁぁぁぁーーーーーーー！！もうやってられるかーーーーーーーーっ！！！！！」
「こらっ！！まだ今日の１０分の１もいってないじゃない！！集中しなさいよ、集中！！」
「なんで俺がこんなことしなくちゃいけないんだよ。ほんとに詐欺だ・・・。ただ騙されて連れて来させられて勉強させられて生意気なガキの子守させられ―痛てっ！！」
「無駄口叩いてないで頭を働かす。あんたがひと言無駄な事を言うたびに身長が１ミリ縮まると思いなさい。今度は角だからね」

一個旅団がどれほどの規模なのかちゃんと聞いておくべきだったな。まぁあいつは知らなさそうだったが。
アナキスは臓器がせり上がる感覚に襲われながらも、今日の午前中に図書室で行われた姫とのやり取りを思い出していた。

☆☆☆

客観的に見ればたった数十秒でしかないような行為でも、主観的に見ればそれが2分、3分は裕にかかっていたと思ってしまうほど、人間の感覚というものは曖昧なものなのだ。つまり、空中にいた時間など他の人から見ればほんの数秒であっただろうが、アナキスにとってはそれは2、3分はあったと感じられるほど長かったのだ。それでも投げ出された窓から地面までのおよその目測を付けられるほどの心の余裕も冷静さもなく、風に対する抵抗を大きくすることで少しでも落下速度が落ちるようにとただ手足をバタバタ動かしていただけであった。突き上げてくる風圧が体の自由を奪い、息がうまくできない。眼すらもうまく開けてられない。耳のすぐ傍でうなり声のような爆音が轟き、誰かがこちらを指さして叫んでいるのがうっすらと開けた視界の端にちらりと見えた。だが、その声もまともに判別などできなかった。体中の身の毛がよだち、体内をえぐるような感覚に苛まれ続け、芝生の緑と地面の茶色が眼前に迫ってくる。

だめだ死っ――

地面に叩きつぶされて中身が飛び出る熟れたトマトが頭に思い浮かび、アナキスは咄嗟に目をつむった。原形を留めることなど避け

られないほどの速度で頭から盛大に弾け飛ぶはずだ―そんな生々しい想像に息をのんだ瞬間。

荒々しい引力で、重力とは反対の方向へと引っ張り上げられたのだった。

「――っ！！！」

視界がブラックアウトし、煩雑とした残像が入り乱れた。落下が突然終わり、慣性の法則で伸びた指先とつま先が地面を削る。ちょうど腰の辺り、腹部を支点にして何かがアナキスをとらえたのだった。関節が外れたかもしれないと思うほど、強く上方向に引っ張られた。地面から1メートルの高さの位置できれいにピタリと止まり、だらしなく手足が揺れる。腕や足が自分のものでは無くなったかのように力が入らず、だらんと弛緩したままだ。嗚咽とむせ返るような吐き気がしてくる。

「ぐっ・・・・お、えっ・・・・・っな・・・・」

一体何が起こったのかわけが分からず、頭が働かない。意味を成す言葉が出てこなかったので、本当に記憶がなくなってしまったのかという錯覚にアナキスは陥った。肺に酸素が入り込み少しずつ焦点も定まってきたのは、誰かの足が地面にのめり込んでいるのを捉えた時だった。

頭の中で鐘をガンガンと鳴らされたような耳鳴りから、人々の騒々しい喧騒―

「まさか、気絶したとは言わせまいぞ」

はっきりとした耳障りな、そして嘲笑と侮蔑の声が聞こえた。

サバ折りの状態でやおら顔を上げると、左隣に一緒に落ちてきたヴィクトルが何事もなかったような涼しい表情で立っていたのだった。支えていた力がなくなり、アナキスは地面に突っ伏した。

「ぐえっ・・・・。お・・・・・ま・・・・え・・何を・・・・・し、た・・・・」

絞り出された声は思っていた以上に頼りなく、ヴィクトルには聞こえなかっただろう。草の匂いが肺を満たしきる前にアナキスは腕に力を込め、ゆっくりと起き上った。膝に手をつき、しびれる感覚に襲われたが無理やりに立った。乾いた唇をなめて周囲を見渡すと、城の窓から見えた巡回中の警護隊や訓練中の鎧兵達が驚いた表情ですっかり取り囲んでいた。

「よく聞け、ジュラム国の忠実たる猛者達よ！！私はラインハルト国軍副総司令官のヴィクトル・L・ブランシェだ。そして、この御方こそが他国の見聞と学問に精励し、つい先日この自由と平等の国ジュラムに帰着なさったラインハルト国皇子である。まずはこのような登場の仕方にお詫びを申し上げると共に、皆のものにはこれから行う一興の証人となってもらいたのだ」

ざわざわと騒ぎ立てる周囲の喧騒に負けないぐらいの音量でヴィクトルは叫んだ。その声は6階以上は余裕である高さから飛び降りた後とは思えないほど、冷静な口調だった。いや、本当にこいつもあの窓から飛び降りたのか？目の前のヴィクトルが3重に見える。

「いや、何も簡単な願いだ。時間も取らせまい。ただ今から私たちが手合わせをする、その手合いの行方の証人となっていただきたいのだ。世上に上がっているように皇子は御記憶を無くしてしまわれた、不憫な悲境の最中にある御方だ。様々な治療を施したのだが回復する見込みもなく、皇子だけではなく妹御でいらっしゃる姫君も御苦慮をなさっておいでなのだ。まことに無念極まりない事にラインハルト国民は嘆きに沈んでいる。この件が解決するものならば、この身たとえ朽ち果てようとそれも本望というもの、快く我が身を粉にして見せる次第だ。だが、今のところ見合った手段もなく思い嘆き苦しんでいる最中である」

憂い想うように目を閉じ、数十秒じっくりと黙ったヴィクトルを周囲の者達は見守るように見つめた。一国の忠実な僕としてその身を投げ出すことを厭わない兵士達にとって、ヴィクトルの主君に対する心意気は身にしみて感じ入ったのだろう。誰もがその言葉を静

聴し、次の言葉を待った。
「そこでだ。荒療治と思われるが、一度皇子と手合わせをして過去の勇壮の頃の御姿を思い出してもらおうと思っているのだ。過激な行為に思われるが、これは治療という下の一つの方法。誤解なきよう、そのための証人として皆のものに御覧いただきたいのだが、どうだろうか」
静かにヴィクトルの説明を聞いていた厳つい兵士達は互いの顔を見合わせ、そして一気に沸いた。はやし立てたり、野次を飛ばしたり、持っていた武具を叩いて盛り上げたりし始めたのだ。中にはどっちが勝つかという賭けなどを募り始めた者までいるほどだ。何はともあれ血気盛んな兵士達である。体裁のいい喧嘩と捉えたのだろう。日常訓練で飽きてきた最中に思いもかけない娯楽が飛び込んできたと思わんばかりの盛り上がりようだ。
「逃げるか、影武者。今なら土下座して謝れば許してやってもいいぞ」
下品にざわつき騒ぎ立てる中、アナキスにだけ聞こえるように抑えてヴィクトルは言った。
「・・・・一体何が目的だ。図書室での一発を謝れってのか・・・・観客の前で・・・・。くだらねえ・・・・。くっそ、頭がくらくらする・・・・」
「いや、あのことはそれほど重要ではないが、ただ証人が欲しいということは事実だ。この手合いでお前がもし私に勝てばお前を影武者として受け入れてやろう。人目があるときはお前を皇子として崇めてやってもいい。命令にも甘んじて従おう。・・・・だが、お前が私に負けた時は―」
「・・・・・」
「お前を姫様の御傍から追放する」
「・・・・・勝敗付きか。ただの手合わじゃないってことは、薄々と感じていたが・・・・」
攪乱していた意識もはっきりとし始め、力も入るようになった拳

を握りしめてアナキスはヴィクトルを睨んだ。３重に見えていたヴィクトルの顔が2重になりつつある。
「勝敗の結果はどっちにしろ俺の納得のいくものじゃねえが・・・・公然とお前をボコボコにできるのなら、なんでもいいぜ」
「減らず口が・・・それはこちらの台詞だ。手加減はしない。容赦もしない。せいぜい死なぬようにするんだな」
くるぶしまでのめり込んだ両足を引きぬき、ヴィクトルは低い声で言い返した。そこでアナキスは目を見張った。引きぬいた両足が淡く光っていたのだった。
「これが宝玉の力、宝力だ。お前みたいなストリートの生活などをしてきた者には見ることも、触ることも、ましてや聞くこともない非公式武器だ。それほど最重要機密を姫様はこんなやつに・・・」
喧騒の中でも歯ぎしりが聞こえたようだった。それほどまでに口元を歪め、見る者を射抜くような眼光でヴィクトルはアナキスを見据えた。宝玉を握った右手も淡く幻想的な光に包まれ、揺れ動いている。
「窓から飛び降りた際の着地もこの力を使ったまでだ。だが、お前に説明する必要などない。もうここにはいられないのだからな・・・・。――いざっ！！」
小さな気合いと共に吐き出された呼気が合図となり、ヴィクトルが走り出した。
騒ぎ立てる兵士達がさらに二人を包み、中心を覆い隠す。聞きつけて走ってきたケフィーの背伸びでは見えない程に。

ヴィクトルの復讐と宝玉　五

予想以上の素早さにアナキスは目を瞠ったが、後れを取るほどではなかった。

流れるように走り出したヴィクトルは宝玉を左手に持ち替え、右手で神剣グラムを抜刀した。勢いそのままにアナキスの首筋めがけて逆手で薙いだが、紙一重でかわされ間合いが離れていく。神剣の切っ先がすぐ目の前をかすめたにも関わらず、アナキスは顔色一つ変えずに迫り来るヴィクトルを見据えているだけだった。そしてヴィクトルも決して手を抜いていない一振りをかわされたことに驚きもせず、空を切った神剣を指先の動きだけでうまく順手に持ち替え、今度はアナキスの左肩を袈裟切りにした。―が、それを上回る早さで円を描くようにサイドステップ、ヴィクトルの空いた左わき腹を狙いにかかる。

「大振りすぎんだよ！！ガラ空きだぜ！！」

踏み込んだ軸足と上半身の体幹をうまく使い、周囲の空気が混ざり合うほどの回転速度でヴィクトルの肋骨をへし折りにかかった。土塊が砕けるようなくぐもった鈍い音と、木の枝を折った時の感触を残しつつ頽(くず)おれる副総司令官がアナキスの脳内にフラッシュバックしたことだろう。

――目の前にいたはずのヴィクトルが消失しなければ。

「―っ！！！」

思いもかけない出来事に言葉も出ず、渾身の一発が唸りを上げて空回った。飾りだけの赤い外套が踊るように舞う。城内から飛び降りた後の覚束ないふらつきが未だにまとわりついているのかと見間違うほど、揺れ動くようにして残像を残しながらヴィクトルが眼前から消えたのだった。それでもヴィクトルの両足を淡く照らしていた宝力が光度を増して輝き、這うようにして背後に迫ってきたことだけは視界の端に捉えることができた。だが、体が凍りついたよう

に動かないと分かった時はもう既に遅かった。
「くっ・・・・・―がっ！！」
祭りみたいにはやし立てるジュラム兵達の狂喜の中、アナキスは驚きと苦悶の声を上げた。
「て、でめぇ・・・がっ・・・ぐっ・・！！」
背後に回ったヴィクトルが、絡ませた右腕でアナキスの喉元をぎりぎりと締め上げていく。アナキスの意識を落とすように固く喉元をきめた格好で、副総司令官はさらに体をのけ反らせた。
「血液を宝玉内に流し込みニューロンと同調した流動性硬化炭素をバネのように両脚部の筋肉組織に組み上げ、そして人間の許容範囲の速さを超えた極点へ一気に上げたのだ。・・・いや、宝力を両足に展開したといった方が知恵のない貴様にとっては分かりやすいかもしれんな。使い方までは知らないにしろ、姫様からその概要の程は聞いてはいるだろう」
浮きあがった両足をバタつかせながらもがくアナキスの耳元でヴィクトルは小さく囁いた。青金石を思わせる光の強い碧眼が影武者を冷徹に見据える。
「私の先ほどの神剣をかわした動きといい、慣れた間合いの取り方といい・・・貴様、一体何者だ。まるっきりの素人ではないな」
「く、っそ・・・ぉおごっ・・・・・！！」
左手に持った宝玉が光度を増し、それに比例してアナキスの顔色が白くなっていく。意識が途切れかけているのか、焦点ががまるで定まらずあらぬ方を泳いでいる。
「それともう一つ聞きたいことがある。貴様、自分をストリートチルドレンだと言っていたが、どうやって今まで生きてきたのだ。物乞いか、ゴミ拾いか、ストリートと言えどもどこかの施設に入っていたのか、あるいは・・・・」
暗示をかけるように低い声でヴィクトルは耳元で小さく呟いた。
「―盗みをして生きてきた罪人であったとか・・・・」
「っぶはぁぁっ！！！っ・・・はぁっ！！はぁ・・・はぁ・・・！

！」
締められていた腕が解かれ、アナキスは地面に崩れ落ちた。後、数秒遅ければ視界が完全に白く染まりかけ、脳に障害が残るほど酸素が欠乏していただろう。
「これしきのことで御休憩なさっては、ジュラム国の猛者達に笑われますぞ、皇子。これも治療の内です。耐えて下され！！」
四つん這いにしてせき込んでいたアナキスのわき腹を容赦なく蹴りあげながら、ヴィクトルは周囲に聞こえるような大声で叫んだ。神剣グラムを鞘に戻し、淡く輝いていた両足の宝玉の光が消え失せる。だが、それに反応するかのように宝力が右手に宿った。神々しく光る手でアナキスの髪の毛を引っつかむと、そのまま赤子を扱うように軽々しく持ち上げたのだった。そして―
「御記憶がお戻りになるのなら、不肖ヴィクトル、激を下す失態の処罰など甘んじてお受けいたしましょう！！国のため皇子のためそして姫様のために私が犠牲になりましょう！！」
左手でアナキスの顔をぶん殴った。鼻血が飛び苦痛に表情が歪んだが、ヴィクトルはまるで臆面も見せず、さらに手を休めず、今度は放した左手と同時に繰り出した裏拳で殴り飛ばした。鈍い音をあげて吹っ飛び、地面を滑って行く。
「ぎ、ぐっ！！！――調子に、乗るなよっ！！！」
―が、アナキスは砂埃を巻き上げながら崩れ落ちることなく着地し、片目でヴィクトルを睨みながら反撃に転じた。込めた力で地面を蹴りあげて距離をつめ、飛び膝蹴りを放った。獣のようにしなやかな攻撃がヴィクトルの顔面を捉えたと思った瞬間、またもヴィクトルは宝力を両足に展開し、音速の速さで消えた。
「ちぃ！！またかっ！！！」
反撃かなわず一回転して着地したアナキスは視線を巡らせた。まるで地面を這う生き物のように明滅する宝力の軌道に目を凝らしたが、早すぎて追いつかない。途切れ途切れに捉えた辺りを蹴りあげるが、むなしく空を切るだけだった。

「お前！！姿を見せやがれっ！！」
声高に喚いてもどうすることもできず、ただ顔をせわしなく動かすことしかできなかった。そんなアナキスをあざ笑うかのように明滅する宝力が近づいてきた。わき腹に激痛が走ったと思いきや、鞭に打たれたような痛みが膝を襲い、そして顎を蹴りあげられた。意識がかすんでアナキスは思わず膝をついた。
「ぐっ・・・・くそっ・・・！！がっ！！！」
背中を蹴られた拍子に地面に突っ伏しかけたが、襟首をつかまれ、またも軽々しく持ち上げられた。むせ返るようにして吐き出した血で白いシャツが滲んでいる。
「神剣グラム・・・。これはラインハルト国の秘剣と言っても過言ではないほど、世に知られていない代物だ。それがなぜお前みたいなストリート育ちの愚民が知っている。しかも、薄暗い図書室で、一目見ただけで、区別ができるなんてな・・・。少々おかしいじゃないか」
神剣グラムに手をかけながら、ヴィクトルはまた声をひそめた。普通の会話もできないほどうるさく騒ぎ立てる兵士達に取り囲まれているのでその必要もないのだが、副総司令官はそれでも毅然とした態度で小さくアナキスに問いかけたのだった。まるで一つの仮定を生徒に証明してみせる学者のように、分かりやすい説明を加えながら。
「きっ・・っぐ・・・・」
「お前の裏にはもしかすると何か強大な権力者が関わっているのかもしれんな。そもそも影武者と言えば、主君の死亡を隠し他国を混乱させるといった防衛上極めて重要な役割であり、一国の柱である地位に就く者のことを言うのだ。怒号弓矢が飛び交う戦場に堂々とはぜ参り、命をかけて主君の代わりとなる者。時には命令も下し、戦況を読み考えておかなければならない知恵と行動力、つまり言葉通り主君の影となるのだ。だが、一方では容易に要人の傍に控えることができる・・・。雇う側もその人物の、主君に対する忠誠心を

信用しなければ成り立たない非常に繊細な策なのだ。目下戦争中の祖国とハバリアント連合国の現状を加味すれば、顔形を変えてまで姫様にお近づきなり祖国ラインハルトの懐に飛び込むことに多大な価値があるだろうな・・・」

「な・・・にが、言いたい・・・っぐ・・・・」

「怪しすぎるのだ。ただのストリートが国宝の知識を備えており、体術を会得しており、そして簡単に影武者として抜擢されるなんてな。貴様、ハバリアント連合の間諜の類か何かだろう。・・・そうなれば貴様を影武者に推薦したシルマール枢機卿も怪しいこととなる」

重さを全く感じさせないほど軽々しく持ち上げていたアナキスを、ゴミでも扱うように投げ飛ばした。はやし立てる声が同時にあがる。

「憶測の粋は脱しないが証明するまでもない。・・・・ここで貴様は敗れるのだからな。二度とこの城内に立ち入らないようにしてやるさ」

もう一度引きぬいた神剣を不気味に構え、アナキスへと狙いを定めた。

立ち上がることもままならないアナキスはただ苦痛に満ちた顔だけを向けることしかできなかった。泥だらけの身なりからは、権力者のような気品と格式溢れる雰囲気などまるで漂ってはいなかった。どちらかと言えば、新人にルールを教える監獄の囚人のようだ。

「・・・はぁ、はぁ・・・さっきから、聞いてりゃ・・・ぐだぐだと、わけのわからねえこと・・・ぬかしやがって・・・・！！。いいか、俺は、ただここに連れさられただけだ・・・。戦争がどうとか、間諜がとうとか、主君がどうとか、俺には、いっっっっさい関係ねえ！！あのわがままチビガキとお近づきになんて、なりたいとも思わねえよ！！むしろ、こっちから願い下げだ！！俺のことを犬でも扱うような馬鹿な態度が気に食わっ―」

最後の言葉は音となって空気を振動させることができなかった。

まるで言葉が切られたような圧がアナキスの言葉をかき消したのだった。目の前で高々と掲げた神剣から悲鳴のような唸り声が上がっている。

脳内ニューロンに同調した流動性硬化炭素が高速回転して神剣グラムを覆い尽くしている。高周波をあげて神剣にまつわりついた宝力が蠢くように異形の姿をして光り輝いていたのだった。

「姫様を侮辱するなと言ったはずだストリート育ち」

いつの間に切られたのだろうか。頬から鮮血が伝い、滴り落ちた。

「やはり生かしてはおけん・・・。追放するよりもこのまま塵と化してやる」

背筋を舐めるような悪寒が走り、身体の節々が神剣の振動に呼応するように震える。振りかぶった一光が視界いっぱいに広がり、切り刻まれる激痛が体中を襲った。切られた部位の感覚がなくなり、意識がふっつりと途切れた。

お姫様の事情

「お目覚めですか、お兄様？」
額に何か冷たいものが置かれているのに気づいて俺は目が覚めた。薄暗い視界に、ぼんやりとした光が差し込んでくる。
「うっ・・・・んっ・・・」
「お兄様。お加減はいかがですか？大丈夫ですか？」
うっすらと目を開けると、あのチビガキがすぐ目の前にいた。真上から覗きこむような格好をしていたので、流れるように艶やかなブロンドの髪が俺の頬に当たってくすぐったい。
この少女はラインハルト国のお姫様であり、今はここジュラム国に滞在している高位の要人だ。だが、小柄で華奢な体躯さらにはきれいに整えられた柳眉をハの字に曲げている心配げな表情からは、一国のお姫様という高貴さよりも一人の少女然とした幼い雰囲気が漂っている。絹のようになめらかな肌触りを連想させる肌の白さが、意志の強さを示す緋色の両目を際立たせていた。何もしないでこのままじっとしていればかわいらしい深窓の佳人なのだが、神様は非道なまでにいたずらだ。暴力、わがまま、自己中心的娘。こんなやつが一国を預かるなんて考えただけでゾッとする。
目が覚めたことに安心したのか、姫はほっと胸を撫で下ろして四つん這いの格好からベットの横に座りなおした。
・・・・そんなことよりも、ここは一体どこなんだ？確か俺は城内から飛び降りて、中庭にいたんじゃなかったか？そして兵士達に囲まれて、ヴィクトルと戦って、宝玉でやられて―
今までのことを思い出そうとすると、針で刺したような痛みが背中や顔さらにわき腹に走り、思考が遮ぎられてしまった。鈍重な感覚が頭を襲う。
「頭が・・・・重い・・・・」
「仕方ないですわ。頭を強く打たれたみたいで、大きなこぶができ

ていましたから。今、ちょうど冷やしているところですわ」
　つぶやくようにか細い声だったが、意外にもしっかりとした返事が聞こえてきた。とりあえず考えることは止めて、現状把握に俺は務めることにした。
「そうか。・・・・・けど、冷たいのは冷たいんだが、なんだか固いものが額の上に乗っているような感触が・・・・。濡れタオルにしちゃ、固すぎやしないか？」
「それはそうですとも。濡れタオルじゃなくてただの文鎮ですもの」
「ぶ、ぶんちん！？」
「それも最高級の纏絲水胆瑪瑙高彫文鎮です」
「読めるか！！」
「私の身の回りの物で一番冷える物品といったらこの文鎮しか見当たらなくて・・・。でもご安心ください。しっかりと氷水で冷やしてから乗せておりますので」
「しっかりもくそもあるかよ！！ってかなんでそもそも物品を探すんだよ物品を。普通タオルか何かでいいだろ。あっ今お前濡れた手タオルで拭いたな。そのタオル使えよ」
「何を仰いますやらお兄様。タオルなんて使っていませんわ、これも文鎮ですわよ。世の人々はこれで皆手を拭いていらっしゃるのに、そんなこともお分かりにならないなんてずいぶんひどく頭をお打ちになられたのですね」
　氷水で張られた桶に文鎮を戻すのを見て俺は叫んだ。明らかにふんわりとしたタオルで濡れた手を拭いてやがるじゃないか。カチャカチャうるさいな。一体いくつ桶の中に入ってるんだよ。
「それとも頭を打った際に記憶そのものを無くされたのでしょうか。自身のお名前・・・いや、お兄様の名前はまだ教えていないわね。・・・自身のお立場、分かりますか？」
　不気味な笑みを湛えながら姫はアナキスに肉薄した。その迫り方といったらまるで逃げ道を塞ぐ狩りのように、あるいはまるで暗示でもかける悪徳商法者のように、計画された陰湿さが伺えた。せー

の、と煽って催促すらしてくるが―
「・・・俺は、アナキス、だ。ジュラム国ストリート育ちの、アナキスだぞ」
　そんなつまらない手に引っ掛かるほど、自分のアイデンティティーは無くしたくなかった。―というより、今はそんなガキの遊びに付き合ってられるほどの体調でもない。
「・・・・・・なーんだ、意識はちゃんとあるようね。このままあんたの記憶が飛んで、代わりにお兄様の記憶が宿ればよかったのに」
「て、てめえ。それはそれで怖いぞ」
「ふん。冗談に決まってるでしょ。そもそもあんたなんかに濡らしてあげる布地なんてあるわけないじゃないの。甘えないでよね」
「露わしたな本性を。お前、俺をなんだと思ってんだ。大事なお兄様の影武者様だぞ。もっと丁寧に扱えよ。ただでさえ頭がガンガン響くのに。――もう文鎮はいい！！乗っけんな！！」
　冷水でキンキンに冷やされた文鎮を乗せてくるのを手で払いのけながら俺は抗議した。頭をもたげただけなのに、背中や首、わき腹に痛みが走る。ちっ、こいつ絶対わざとやってやがるな。
「きゃんきゃんうるさいわね。私のベットで看病してあげてるんだから文句言わないでちょうだい。むしろ有り難く思うことね」
「これが看病って言うか？遊んでいるだけじゃないか。大体お前はいつもそう自分が正しいと思ってべらべらと―」
　何か引っかかる言葉に思考が遮られ、俺は口をつぐんだ。

――ん？私のベット？

　ゆっくりと視線だけを巡らせて周りの状況を確認してみると、薄いピンクのレースがベットをすっぽりと覆い隠していた。それにいつも俺が使っているベットとフカフカ度が違うし、さっきから甘い香りが漂ってくるし、枕もとの横にはバカでかい本がでんと数冊置かれているじゃないか。確かに、ここは俺の部屋でも病人や怪我人

にあてがう病室の類ではないようだが。ということは、ここはこのチビガキの部屋でこいつはいつもこのベットで寝ているのか。
　そう思うと、無意識に居心地が悪くなった。なんだかじっとしていられない。
「あ、あんまりじろじろ見ないでよ。・・・あんたなんかを私のベットで寝かせるなんてしたくないけれど、皆の手前私が看病してあげなきゃいけないのよ。それに扉の向こうにはケフィーも控えているし、あんたをほったらかしにしてここを離れるわけにはいかないわ。いい、仕方なく看病してあげてるんだからね。・・・だから、ちょっとは静かにしなさいよ。気付かれちゃうじゃない」
　ベットに腰かけながら文鎮を取り下げた姫は桶の中にちゃぷんとそれを浸した。
「本当は絨毯でもベランダの手すりにでも横たわっていた方があんたには似合うけれど」
「手すりって、俺は餌をもらいに来た鳥か」
「・・・・で、でももし急にケフィーが入ってきて奇妙に思われたらいけないから、仕方なくベットを使わせてあげてるのよ。口応えしないで感謝しなさいよね」
　ぷいっと顔をよそへ向け、姫は頬を膨らませた。一体何に不満なのかさっぱり分からないが。
「はっきり言っておくけれど、これは『お兄様』だから手当てしてあげているんだからね。勘違いしないでよ」
「お前の態度を見ると勘違いのしようがないがな。むしろそこまで言われると殺意が湧いてくるぜ・・・」
　腕に力を込めて俺は体を起こしにかかった。気を付けて筋肉を動かすという動作をしなければ、思うように動けないほど体中が痛む。たっぷり3分かけてなんとか上半身を起こすことができたが、なぜ顔をしかめるほど激痛が走るのだろうか。一体俺は何をした。いや、何をされたんだ。
「・・・・」

姫の視線を感じて見てみると、じっと俺の動作を眺めていた。観察でもされている気分になり、胸くそ悪い。ゆるくウェーブした髪の毛がまるで重力を感じさせないほど、ふわりと揺れていた。指で梳かせば、雲を掴むようにするりと指の間をすり抜けていきそうだった。

「何見てんだよ。・・・・・滑稽か？笑えばいいだろ」

「あーーーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはーーーーーーーーーっ！！！！生まれたての小鹿みたい！！プルプル震えてるーーーーーーーーーーーーーっ！！！！」

なんてやつだ！！こいつ本当に笑いやがった！！

貴族特有の口に手を当てて歌うように上品に笑う——という笑い方からはまるで程遠い豪快な笑い声をあげた。小さな口いっぱいに広げて笑うその意図的な仕草からは心の奥から面白がって破顔していないと分かるのだが、それでも馬鹿にしたような表情が非常に気に障る。

「う、うるせぇな、体が痛いんだよ！！てめぇ、もう我慢ならねぇ！！大体なぁ、すべてはお前が俺を騙してこの館に連れてきたのが原因だろが！？そのせいで望みもしない貴族の生活なんかさせられて、おまけに勉強もさせられて、自由も奪われて！！お兄様の影武者をやってくれだぁ！？ふざけんじゃねぇ！！とっとと俺をストリートにもど—」

「——ばかっ！！」

「—なっ・・・・んだとぉ！？今度はバカ呼ばわりか！？いい加減にしろよ！！」

急に笑い出したと思ったら凛とした一声に叱責されて、思わず俺はひるんでしまった。額がひっつきそうなほどの距離で非難してやるつもりだったのだが、一気に険しい顔つきになった姫の顔をまじまじと見つめてしまうことしかできなくなったのだ。すぐ近くで甘い香りがする。

「ばかってんのよ。・・・・・・・・・・・・全く、なんに

も知らないんだから・・・・」
「何だって！？俺が何を知らないんだ？」
「何でもないわよ！！」
逆ギレでもされたように、今度は不機嫌に姫は表情を曇らせた。緋色の両目が射すくめるように俺を見返してくるのだが、吸い込まれそうなほど綺麗なその瞳には俺の厳めしい表情が紅くなって写っていた。
「と、とにかく上の服を脱ぎなさい。・・・・包帯、変えるから・・・」
「は、はぁ！？いきなり何だよ。っていうか俺、包帯巻いてたのか。いつの間に」
「それはケフィーが巻いてくれたんだけれど、そろそろ新しいのに取り変えなくちゃいけないから。・・・・ホラ、ぬ、脱いでよ」
事もなげに姫は言いのけた。つもりだったのだろうが、またもそっぽを向いた耳がほんのり赤くなっているのが分かった。笑い出したり、怒ったり、顔を赤らめたり、こいつは何がしたいのだろう。
「・・・・・・・・・何よ。い・・・・嫌なの・・・・・・？」
「いや、そういう意味じゃなくて―」
「じゃ、じゃあどういう意味なのよ」
身を乗り出すようにしてベットに両手をついた姫は俺の顔をじっと見つめてきた。すっかり群青色に染め上げられている夜空にかかった満月が、朱色に染まった姫の頬を淡く照らす。
人の趣味に介入するつもりはないのだがここではっきりと言わなければいけない。はっきりと言えばいくらこのわがままで自己中なチビガキでも分かってくれるだろう。これはこいつのためにも俺のためにもひいては全人類のためにもなることなのだ。
そう俺は心に誓い、正しい行いをする清澄な気分に満ちたまま、姫の肩に手を置き―
「動物が好きだとしても、哺乳類には手を出すな。お前みたいな野蛮な人間はせいぜい鳥類が限界だな。これ以上俺も動物実験される

のはごめんだし、包帯で巻かれ殺されたくはない。人の命をそう簡単に粗末にしてはいけないな。俺はそこまでお前に寛容にはなれない。ごめんな。いや、むしろお前が謝れ。後、俺に触れるな。そして去れ。ケフィーを呼べ」

「――――う、う、う、、、う、、、う、う・・・・・」

自分の業に気付き感涙しているのか、それとも今まで犠牲になったか弱い動物達に懺悔の念を抱いているのか、くぐもった声が部屋中を満たしていき、顔を上げた姫の表情は俺への感謝の気持ちで一杯になって―

「っぅうるさぁーーーーーーーーーーーーーーーいっ！！！！！！！！！早く脱ぎなさぁぁぁーーーーーーーーーーいっ！！！！！！包帯ぐらい、巻けるわよーーーーーーーーーーっ！！！！！！」

そんなはずもなく、濡れた文鎮が空を飛んだ。そして獣じみた雄たけびをあげつつ、引きちぎらんばかりの勢いでシャツに手をかけられた。

お姫様の事情　二

「ヤルんなら早くしろよ」
「分かってるわよ。・・・・すぐ終わるから」
「もたもたするなよな。全く、これだから素人は」
「うるさいわね・・・・。あんたこそ、早く、たちなさいよ・・・・。た、たたないと・・・・・・・・・わ、私はできないんだから・・・・」
「ああ、少し時間がかかる」
「・・・早く・・・・・・・」
「今やってるって」
「・・・・・・・・・・・・・まだなの、ねぇ？。――さっきから全然変わってないじゃない。もう、ほんとにだらしないんだからっ！！ホラ！！」
「いっ！！おい、ちょ、何すんだよ！！やめろ！！そこは、あっ――だ、めだ・・・！！くっ！！やめっ――」
「こういうのはゆっくりするんじゃなくて素早くやるものなのよ。だらだらしても時間がかかるだけで、一瞬なんだから――っていやだ！！手についちゃったじゃないの！！あんたが暴れるから！！」
「おまえが、勝手に動かすから、だろが・・・・。はぁ・・・こ、こっちのペースでやらせろよな！！っ・・・はぁ・・・はぁ・・・」
「じっとしてって言ったじゃな！！あーあ、お洋服にもついちゃってるわ・・・。あんたのせいだからね！！」
「そ、そんなに・・・・飛び散ったのかよ・・・」
「見なさいよ！！絨毯にもついてしまっているし、ほんとに行儀が悪いんだから！！それぐらい我慢しなさいよ！！男でしょ！？」
「はぁ、はぁ・・・。ひと、の、せいに・・・するな・・・。もっと優しくしてくれたらこんなことにならなくて済んだのに・・・」
「コレ、落ちるかしら？かなりの量が溢れ出ちゃってるわよ・・・。

あ～あ、シルマール先生にばれたら怒られる・・・」
「だ、大丈夫だろ・・・・・・・・。―だって、それ、ただの消毒液じゃねえか」
右往左往している姫を見ながらアナキスはそう呟いた。肩や胸部の所がふわふわのフリルで可愛らしく装飾された洋服が、まるでぶち模様のように斑を作っていたのだ。手にした消毒容器をサイドテーブルに置き、姫は濡らしたタオルでポンポンとしみになった部分を叩いている。
ここは、この小柄の少女、つまりラインハルト国第一皇女にあてがわれた大部屋である。大部屋と言っても少女に見合った子供向けじみたものではなく、一国の姫が所有するような豪奢な造りであった。書斎机は手触り滑らかなマホガニー製であり、夜でも煌々と明かり照らす馬鹿でかいシャンデリアは細部に至るまでオーダーメイドで作られた一級品である。敷き詰められた絨毯は頬ずりしたくなるほど気持が良く、希少動物を使用しているであろうことが伺えよう。洋箪笥や斜光カーテン、ソファ、鏡台そして小物に至るまで、お金と労力がかけられている大部屋であるのだが、それでも姫は満足していなかったのだ。それもそのはず、この一室は祖国であるラインハルト国内サウスライン城ではなく、ジュラム国の客室用別棟に設けられた要人用の部屋だからだ。まだどこに何があるのかすべてを把握しきれていないこの空間に、姫は慣れない苛立ちと新調な匂いに不満を抱いていたのだ。―しかし、姫が不満を抱く要因はそれだけではなかった。
その要因とは、ちょうど姫によってたたき起こされた一人の青年である。彼の名前はアナキス。ここジュラム国で生まれ、親や身寄りのいない言わばストリートチルドレンとしてその日暮らしをしていたごく普通の青年であった。今はラインハルト国の姫がジュラム国に来訪する時に合わせて雇われた、姫の兄の影武者をやっているのである。姫の兄つまり、ラインハルト国の皇子の影武者として。
「あんたが、早くベットから立ち上がらないからでしょ！！寝ころ

んだままじゃ包帯も消毒もできないから、助け起こそうとしたのに！！あんたが暴れてしまうからこぼしちゃったのよ！！」
「俺のせいじゃねえよ！！お前が急に俺を起き上がらそうと体を動かしたからだろが！！ゆっくり動かさないと体中が痛いんだよ！！」
反駁するアナキスを尻目に、染みで汚れた洋服を素早く脱いだ姫は薄いドレス姿に様変わりをした。小柄で華奢な細腕が目立つ体躯が露わになり、部屋の中まではっきりと明り照らす月の光を受けて肌が粉雪のように白く映えた。だが、陶磁のように精緻なラインを描くその頬も今はハリセンボンのようにぷくっと膨らみ、反論を反論で返すためのエネルギーを貯めていたのだった。小さな口が薔薇の蕾のようにすぼめられる。
「何よ！！私が包帯巻いてあげるって言ってるのだから、黙って巻かれていればいいのよ！！そう、ミイラの如くにね！！」
「んだと、このチビガキ！！あんまり調子に乗ってると路上の溝に転がり落とすぞ！！怖いんだぞ！！恐ろしいんだぞ！！一体何億個の病原菌が繁殖と増殖を繰り返すことができるその楽園の溝で巣食っているか知らないだろ！？」
「汚らしい表現を使うのはやめてくれるかしら！！そんな腐った地域で育ったもんだから頭の中まで埃まみれのカビだらけになっているのね！！ああ厭らしい！！」
「自由と平等の国ジュラムとは言え、陽の当らないようなストリートじゃ糞尿で薄汚れた地域がたくさんあるんだよ！！むしろ、お前みたいにのうのうとラインハルトのお姫様として操り人形のように生かされてきた意志のない人間の方がお似合いかもしれないな、そのストリートの地域に！！」
「やだちょっとそんなに近くで喋らないでくれるかしら！？口を開けるたびに目視できるほどの菌が暴れまわっていて、とても下品なのだけれど！！こうなったらあんた専用の法律をつくるわよ！？あんたぐらいの大きさの人間なら一回あたりの平均換気量が０．５リットルで一分間の呼吸数が約２０回、だとすると一日の呼吸回数だ

と２８８００回・・・だから、あんたの一日の呼吸を１４４００リットル以下に設定するわよ！！そうなれば少しの運動もできなくなるわね！！」
「わ、分けわかんないこと言ってんじゃねえよ！！一国のお姫様だかなんだか知らねえが、オツムばかり成長しやがって！！――はは～ん、脳みそばかり皺を寄せることにかまけていたから、体の方の成長が止まってんだな！？全く、チビガキにふさわしいお子様体系だぜ！！」
「な、なななななななにょ！！い、い、今は成長過程だから身長に対する成長曲線が緩やかなだけよ！！この、むむむむむ、むむ、胸だってすぐに、シルマール先生みたいに大きくなるんだから！！」
「はぁ！？俺がいつ胸の話ししたんだよ？・・・・・・・・なるほど、お前、自分の胸の小ささを気にしてんのか！？ガキのくせに！？これは滑稽だぜ！！ハッ！！性格の悪さじゃなくて自分の貧相な胸のことは自覚してるんだな！！」
「・・・・何か言ったかしら・・・・・・・・？やっぱり、あんたみたいに口を開けば菌と毒しか吐かない歩く不穏分子が、私のお兄様の影武者を務めるなんてできるわけがないわ！！シルマール先生に言って即刻解雇してもらうしかなさそうね！！」
「あーそうかい！！望むところだぜ！！今すぐ俺を解放しろってんだ！！早いとここんなワガママ自己中娘のお守から解放されて、無駄な勉強からも解放されて、またストリートで自由気ままに暮らしたい――っぶっくしゅっんぅ！！」
　話の途中で耐えきれず、アナキスは盛大にくしゃみをした。出た鼻水を手で擦り、ぶるっと身を震わせた。いくら春風凪ぐ季節になったとは言え、夜はまだ気温が下がって冷え込むのだ。ましてや上半身の服を脱がされていたために直ににその寒さがこたえたのだろう。両手で庇うようにして体を摩りながらアナキスは目の前の姫を見た。案の定、飛び散った鼻水と唾を顔いっぱいに浴びた姫がつっ

立っていた。
強制的に脱がしたことの責任を感じているのか、それ以上反論はせず、姫は呆れたように深いため息をついた。肩のところで軽くウェーブしたブロンドの髪が姫のやりきれなさに呼応するかのように小刻みに震えた。大きな緋色の両目だけはアナキスを睨み捉えたままであったが、先ほどの勢いも消え、タオルで丁寧に顔を拭いた姫はゆっくりと口を開いたのだった。
「・・・・・・とりあえず、包帯巻くから・・・」
布切れだけでも肌に付けたかったほど寒かったのだろう。呟くように言った姫の言葉にアナキスも何も言わずにただ頷いただけだった。

☆☆☆

「一体貴官が何をしでかしたのか分っておるのか、副総司令官」
しわがれた声が暗い部屋を震わせた。老齢を思わせるその声色には抑揚という覇気が感じられなかったが、それでも聞く者が思わず居住まいを正してしまう力が染みついたように込められていた。
「申し訳ございません、ガサラム士官。あの影武者に私が提言をして、さきほどのような独自の判断を下しました。その経緯及び結果は取り巻きとして一部始終見ていたジュラム兵らが語った通りでございます。別段、私が弁解することはございません」
ガサラムと呼ばれたその老人は短く刈り込まれた頭を掻き、座った椅子を回転させて目の前の青年に向き合った。両端に置かれた書棚で幾ばくか狭い感覚を思わせるような部屋であったが、一番感じる圧迫感はこの老人から発せられているといってもいいほどだ。モ

ノクルの奥で光るガサラムの眼はどんな機微な反応も見過ごしはせず、組んだ両手に顎を乗せた格好からはどんな嘘も見抜く自信が漲っていた。
「一国の皇子を殴り飛ばしたのじゃぞ。このことが口外してしまえば、どれほどの不信感を募らせることとなるか、理解が及ばない貴官ではあるまい。暴戻(ぼうるい)なラインハルト国民のレッテルを、祖国だけでなくここジュラム国にも煽ることになってしまうじゃろうて・・・。何か真意があるのなら聞かせてもらいたいものじゃな、副総司令官」
あまり精神が強くない人なら、上目遣いで問いただしてくるガサラムの言葉を聞いただけで足がすくんでしまっていただろう。だが、それでも書斎机の前で銅像のようにして立っているその青年は、萎縮する様子も見せずただまっすぐガサラムを見返していたのだった。
「申し訳ございません。私の不徳の致すところです」
隙間なく着込んだ軍服や青金石を思わせる切れ長の両目、そして規律を正しく遵守する模範生徒のような風貌の青年は毅然としたままの態度で謝罪の言葉を繰り返すのだった。
「儂が止めに入らなければ、血まみれの骸が転がっていたことじゃろう。＜無宝玉者＞に宝玉をもって成敗するなんぞ、赤子をひねるよりも簡単でかつ卑劣極まりない行為。それをラインハルト国の軍事副総司令官である貴官が行うなんてな・・・。全く呆れるとはこの事を言うのじゃろうな」
「・・・・」
「それに、姫の取り乱しようと言えば・・・。本物の兄者がやられているような、沈痛な表情じゃったの・・・」
その言葉にピクリと体が反応を示した副総司令官―ヴィクトルであったが、まるでそれを隠すかのように深々と頭を下げた。それでも毅然とした態度を崩さず、自分のした行為に信念を持っているような雰囲気は変わらない。そんな目の前の若き司令官の様子を見てため息をついたガサラムは、ゆっくりとモノクルをかけ直した。薄

暗い部屋の中を、モノクルに反射した月明かりの光が走る。
「ですが、ガサラム士官。お言葉ですが私には理解に苦しみます。なぜあのような野蛮で無法者なストリート育ちの男が、姫様のお傍に控えているのでしょうか。勉学もせず、はたまた影になろうという努力も見せず、ただ喧嘩という形で培ってきたであろう我流の武術だけを見に付けた、なんの取り柄もない男ではありませぬか。それを、ただ皇子に似ているという安直な考えだけで・・・。あんなやつは直ちに野生に返すべきです」
「・・・それは私情からの発言か」
「いえ、ラインハルト国副総司令官の立場の上での提言です。あの影武者は姫様に悪影響を及ぼしかねないただの害にしか過ぎません。一刻も早く姫様の下から引き離すべきです」
「貴官に言われずとも分かっておるわ。・・・・・・儂もあの枢機卿はあまり得意ではないからのぅ・・・」
「ならばこそ!!あの男を今すぐに―」
先ほどまで一歩も動くことがなかったヴィクトルであったが、詰め寄るように身を乗り出してガサラムに抗議の声をあげた。すっと通った高い鼻が膨らむ。
「これ、待たんか。そう早まるでない。そもそもあの影武者は、ジュラム国の多数派ラン教徒であるシルマール枢機卿がストリートで見つけてきたものだということを忘れるでないぞ。ジュラム国に条約上、一時的ではあるが世話になっておる現在の関係の中で、その枢機卿の計らいを無下に断ることはできんわい。ましてや枢機卿は姫の憂慮を慮って、影武者の提案を申し出たのじゃぞ。我々がその影の存在を否定すれば姫の御苦慮をないがしろにしているようなものじゃ。・・・・そうやすやすとあの影武者を解雇するわけにはできん」
「・・・・・・・・」
冷静な態度のままのガサラムは目の前の若き副総司令官に冷水を浴びせるような鋭さで諌めた。ガサラムにとって影武者が姫の傍に

いることで発生する価値、またはその影武者の存在意義が思っていた以上に大きな成果をあげていると言うことぐらい承知していた。3年前に祖国ラインハルトを出立して行方が分からなくなっていた皇子が帰ってきたとごまかすだけでどれだけの宣伝効果があるか。それは言わば国を挙げて祝賀ムード一色になる明るいニュースなのである。ハバリアント連合国と目下戦争を繰り広げている兵士達や民にとって活気剤となりえることは間違いなく、実際に皇子が帰ってきたということを聞いたある戦地ではハバリアント連合の部隊の相当数を巻き返したという報告も耳にするほどである。その影武者効果はそれだけではない。親しんでいた皇子の出立にともなって元気が無くなった姫の暗澹たる表情に、輝かしかった笑顔が戻ったのだ。まるで嘘のように笑顔が増え、性格もずいぶんと明るくなったものだ。

あの影武者のおかげで一国の戦況を変えるまでの影響力と、精神不安定の姫を支えるという他の誰にも成すことができない功績をたった2週間のうちにいとも簡単に起こしてしまったのである。そんな成果を理解できないガサラムなどはなく、そして同じく姫のことを第一に考えているヴィクトルが気付かない訳がない。

「それに、どうやら話が変わってしまったようじゃが、今回はあの影に非難を浴びせるいわれは無かろう。むしろ今回の一件については貴官こそ姫に危殆を瀕しかねない無法者になり下がっているようじゃな。何度も言うが、宝玉使いが一般市民に手を出すなどもってのほか、誠に遺憾な出来事なのじゃぞ。状況も状況なら捕縛されてもおかしくなかろう。・・・姫も貴官に対してずいぶんとお怒りになっていたぞ」

「・・・申し訳ございません」

乗り出した身を元に戻し、ヴィクトルは顔を伏せた。歪めたその表情からはまるで自分の行動に恥じているようであった。

人間として常識の知識に欠ける失礼な振る舞いにはガサラムも眉をしかめるのだが、冷静沈着で聡明な副総司令官にはそれ以上に影

武者に対してことさら反発しているように見える。何か、私情のような、個人的な感情が働いて影武者に嫌悪感を抱いているような。
「ふぅ。・・・まぁ、貴官には大好きな姫の傍に居られなくなってしまって残念だが、今は我慢すべきところじゃな」
「な、何を仰います、ガサラム士官！！わ、私が姫様に特別な感情を抱いておると申すのですか！！ただ幼少の頃からお傍に控えていた身としてあの影武者の存在が許せないだけです！！それに、たやすく姫様に近づくだけでなくお体に触れるなどという無礼な行為にも腹立たしく思っている次第であり―」
「慌てるでない慌てるでない。貴官が姫のことを好いておることぐらい、側近達の中では周知の事実じゃぞ。気付いておらんのはあの巨人族のルダだけじゃわい。そんなに顔を赤らめずともよかろう。いやはやここにきて大きな好敵手が現れたものじゃな。それに相手はあの兄上の影武者ときた。また昔のような兄上にすべてもっていかれて、辛酸をなめることになるかもやしれんな――ってどこへ行くんじゃ？まだ話しは終わっておらんぞ。貴官の姫に対する策略というものを伺いたいものじゃが―」
「いえ！！小生のためにお時間を割いていただき、まことに恐縮です。これ以上、士官にご迷惑をおかけするわけにはいきませんのでここで失礼させていただきます。私の粗相、失態に対する処罰は追って姫様から下されると聞き及んでおります故、お忙しい姫様の御手を煩わせておくわけにはいきませんが、直接お会いして拝聴いたします」
　そういうや否や、ヴィクトルはガサラムの制止の声を振り切り、部屋を出ていった。唖然としたガサラムを部屋に一人残して廊下に出ると、自然とため息が漏れた。その表情からは先ほどの慇懃な態度とは違い、どこか物憂げな雰囲気が漂っていた。
「士官こそ話が変わっておられるではないか・・・」
　嫌な汗が額に浮き出ていたが、ヴィクトルは滴り落ちる前に軍服の袖でぐいっとぬぐった。

「私が図書室であの影武者にやられた時、姫様は一体どれほど気にかけてくれたのだろうか・・・」

先ほどから頭の中をぐるぐると駆け巡っていた不安がついに口からこぼれた。ドアに背を預けては目を閉じさらに小さく名前を呟いたが、それはわずかな空間にわだかまっただけで、虚しく消えた。

そして若き軍人は顔を上げて姫の部屋がある東館に向かって歩き出した。その表情からは先ほどの悩ましい表情から一転し、いつもの副総司令官の仮面が掛けられていた。

お姫様の事情　三

「ほら、次は左腕よ。出してちょうだい」
「・・・・」
無言のままアナキスはフカフカの絨毯をじっと見つめていた。まるで地蔵のように固まった状態で、ぴくりとも動かない。返事がない。ただの屍のよう―
「死んでねえよ」
「何も言ってないじゃない」
「・・・なんでもねぇ」
ぶっきらぼうに答えたアナキスを姫は訝しげな視線で見つめていたが、腹をくくったようにズイッと突き出されたアナキスの腕の包帯を外しにかかった。
「左腕も切り裂かれたみたいに傷だらけじゃないの。・・・よく腕が無くならなかったものね。全く、宝玉者となんか戦って・・・。それも素手でなんて・・・。かなうわけないじゃないの・・・・・・ばか・・・・全身も傷だらけじゃないの・・・・・・・ばか」
尻すぼみになった最後の言葉に口を開きかけたアナキスであったが、しゅん、としおらしい表情になった姫の表情に思わず息を呑んでしまいタイミングを失った。
豊かに揺れる庭のプラタナスの葉が月光を遮り、サウスラン城別棟に設けられた姫専用の部屋を薄暗くしていた。そのためなのかどうかは定かではないが、姫の顔つきも暗く翳っていた。ピンク生地の薄いドレスが暗い部屋でも妖艶に浮かび上がり、まるで路上に咲いた一輪のハクチョウゲの花のような高貴さをうかがわせたが、当の本人は手にした包帯を所在なさげにくるくると指に巻いて遊び、どこか物憂げな顔つきのまま顔を伏せてもう一度「ばか」と言葉を重ねるだけであった。その言葉もどこかしら覇気がなく、そしてドレスの色のせいなのだろうか暗い部屋であるにも関わらずほのかに

姫の頬が朱色に染まっていた。
「ああ？ああ・・・これはあのキザ野郎にやられた傷じゃねえよ。盗賊の、いや、じゃなくて・・・その、ふ、古傷だ、古傷」
どういう返事をすればいいのか思いつかず、焦ったように頭を掻いたアナキスはどもりながら声をかけたのだった。女性の悲しげな表情に慣れていないアナキスは視線を彷徨わせてあたふたするばかりである。じっとしていればただただ見とれてしまうほどの美少女にそんな顔を見せられると、さしものストリートチルドレンでさえ閉口してしまうものなのだろう。柄じゃないと思いながらも自分なりの労りの言葉を探した。
「あんなお飾り貴族に俺がやられるわけないじゃねえか。今回はただ油断しただけだ。次はあいつの神剣グラムを奪ってやるぐらいの勢いでやってやる。そういえばあいつ、ココール宮殿御用達のピアッシングもしていたな。あれもついでにもぎ取ってやろう。それに青い軍服にキラリと光るラインハルト国の紋章も流れの傭兵に高く売れるはずだったな。あっ、いや・・・・・だから、その、なんだ・・・・心配、すんな。俺は大丈夫だからお前は自分の心配をしてろ」
「お、お兄様・・・・」
一国のお姫様なだけあって、そんじゃそこらの街美人とは格が違っていた。自らが発光しているかのように煌々と輝くブロンドの髪が薄暗い部屋を明るく照らし、雪のように滑らかな肌はまさにうぶの残る少女然としていた。上げた顔に埋め込まれた緋色の両目からは冬の寒さを吹き飛ばすほどの暖かさが見えた。その小さな頭と小さな背中にはラインハルト国の沽券と期待が一心にかかっているのだろう。
そう思うとアナキスでさえ一つや二つ、元気づけようとする意識も芽生えてくるものだ。使わない脳をクルクルとフル回転、そろった目は―。
「わがままで自己中心的で相手のことなんて一ミリも考えてなさそうなお前がそんな殊勝な表情になると、温暖な気候のジュラム国に

血の雨が降るんじゃないかって心配してしまうじゃないか。お前はただ空っぽのガキみたいにはしゃいでいればいいんだよ。そんなお前を見て、あー俺もまだまだ堕ちた人間じゃねえんだなって勇気づけられるし、一国を担うお姫様が人間として使えないやつだと分かれば下っ端が必死になって各々頑張れるからな。だからお前はありのままでいだだだだだっ！！！！」

―そろった目はなんとも残念なはずれのマークだった。

「さっきから黙って聞いていれば、好き勝手言って！！子供！？使えないやつ！？あんたなんかに言われたくないわよ！！それに心配するなですって！？は～あ！？何言ってるのかしら！！私があんたなんかに心配するわけないじゃないの！！私はただ小さいときから負けたことがないお兄様の功績に泥がついてしまってことに心残りがあるだけよ！！たった一度も、闘技で、ヴィクトルに、負けたことがない、お兄様が、辱められたことに、不満なだけよっ！！勘違いしないでくれるっ！？」

「いだだだだだだだだっ！！つ、つつつねるなよ！！かさぶたがとれる！！血が出る！！腕がもげるっ！！」

「うるさいわね、そんなに軽々しく人間の腕がもげるわけないじゃないの。男だったら我慢しなさい」

「て、てめぇ！！これは我慢しなくていい痛さだろがっ！！言ってることと、やってることが矛盾してるぞ・・・・！！」

「矛盾なんかしてないわ。それはあんたの主観だもの。我慢してつねられればいいのよ」

「この、アマっ――いでっっ！！！！」

つねっていたアナキスの左腕をハープを弾くようにして離した。その反動で体がビクッと飛び上がった。

「―っいっでぇーーーーーーー！！！・・・き、傷を増やすなよ！！傷を！！」

「そんなに元気なら大丈夫よ」

「大丈夫じゃねえから起き上がるのも一苦労してたんだろが！！こ

の暴力女！！――早く包帯巻けよ！！」
「首に？」
「絞め殺す気か！！」
「ふん、分かってるわよ。そんなにキャンキャン喚かないでよ。ケフィーに気付かれるじゃない」
物言いたげな表情であったが、手当てを再開したのでアナキスは口を閉ざした。左腕がやっとくるくると巻かれていく。
「私達がタイミング良く本会議から戻ってこなければ、あんた今頃ミンチになっていたかもしれないのよ。暴言ではなく、感謝の言葉一つくらいは口にしてもいいんじゃないかしら」
「けっ！！今さら恩着せがましいこと言いやがって・・・」
ぐちぐちと皮肉な言葉を投げかけていたアナキスであったが気になる言葉に一気に思考が移り変わり、視線を姫に向けた。
「・・・・・・・お前が間に入ったのか？俺とあのキザ野郎の間に・・・」
「私じゃなくてガサラムだけれど。知ってるでしょ？あの老齢の軍人よ」
「・・・・そのガサラムも―」
「そう。宝玉使いよ」
「・・・」
その言葉を聞くや否やアナキスは眉間に皺を寄せて黙ってしまった。切り傷が痛むので顔をしかめているのではない。先ほどの無意味なやり取りよりも聞かなければいけないことがたくさんあるのだ。宝玉とその術者とは一体何者なのか、外遊中と教えられたはずの皇子が3年前に祖国を出立していたという事実、専属メイドであるケフィーが姫専用の近衛兵という特殊訓練を施された軍人エキスパートであること、そしてこいつの肉親が唯一皇子、つまりお兄様しかいないということ―。
「仕方ないじゃない。だってヴィクトルは宝玉使いでもラインハルト国で5番以内に入る猛者だもの。あんたみたいな孤児が勝てるわ

けないじゃないの」
　ヴィクトルに負けた悔しさを思い出して急に黙ってしまった、と思ったのだろうか。言葉少なげになったアナキスに姫は珍しく優しい言葉をかけた。
「・・・・宝玉使い・・」
「そういうこと。軍の再編投資に当たってラインハルト国が独自に開発した小型戦闘武器よ。あれさえあればどんな戦車一台にも匹敵する力を得ることだってできるんだから。それはこの前教えたでしょ。それを操るのにも特殊な訓練が必要で、手にした物が簡単に操れるものではないの。ラインハルト国では軍の最前線でその宝玉の仕用を推進していて、先のハバリアント連合国との戦争でも使われているはずよ。ま、宝玉の力に頼らなくてもお父様が野蛮なハバリアントの奴らになんか負けたりしないけれどね」
　姫の言葉はアナキスの耳朶を打ったはずなのだが何の反応も示さずに「宝玉・・・」とつぶやくだけであった。細められた両目が白く巻かれた腕を一点に見つめている。
「何黙ってるのよ。今度は熱でも出た？」
「触んなよ」
　額に伸ばされた手を払いながら、アナキスは大根のように白くなった左腕をひっこめた。ホラ、言葉使い！！と、またしても口の悪さをたしなめられたアナキスであったが、それも左から右へ聞き流した。
　許せなかったのだ。金持ち貴族に負けたことにアナキスは憤慨していたのだった。さっきは油断したと言ってはいたが、実際は手も足も出なかったのが事実だ。なされるがまま、まさしくサンドバック状態でどう対処すればいいか分らなかった。訳の分からない宝玉という戦闘武器を使っていたらしいが、そんなことは関係ない。ストリート時代では何が起こるか分らない闇の世界だ。それこそ戦車でも、一個師団でも相手にするぐらいの、その日に命を落とすぐらいの覚悟を決めておかなければ生きてはいけない状況に身を置いて

いたアナキスであったのだ。それほどの意気込みを秘め、喧嘩にしても盗みにしても今まで誰にも負けたことなどなかったのに、宝玉の前では赤子のように軽々しく後れを取るなんて思ってもみなかった。気付けば爪が肉に食い込むほど強く拳を握っていた。

「まったく何よ。手当てをしてあげたお礼は？ありがとうございます、お姫様は？・・・・・だ、大好きです、お姫さまは？」

さらにはこんなガキに助けられたことにも、腹立たしさを感じていた。ストリート時代は誰の手助けなど借りずに生きてきたという自負があったのだからなおさらである。もちろん、つるんでいたやつらと一緒に協力はしていた。同じ屋根の下で生活もしていた。楽しいことがあれば共に喜んだり、悔しいことがあれば共に仕返しに行ったりと、仲間と呼べる友はいた。だが、それでもそんな生活は仮初めのもので、しょせん人間など最後は自分を一番に考えている自己中心的な動物だ。街を歩けば、仲の良い雰囲気を作り、見せかけの友情に花開かせ、仮面のような笑顔を向けて生きている、視線を巡らせればそんなつまらない人々が闊歩していて、嫌気がさしてくる。だからこそアナキスは生きるための力と知恵を付けてきた。朝起きるのも自分次第、昨日を振り返るのも自分次第、そして今日を生きるのも自分次第。すべてが自分中心で回っていた、いやむしろ回していた思っていた。

――だが、それがこうもあっさりと覆されるなんて。

あー・・・・くだらねぇ。

「・・・・おい」

「『おい』じゃなくて、『姫』でしょ。・・・何よ。っていうかさっきの私の言葉、無視しないでよ」

「宝玉の使い方を教えろ」

思わず出た言葉に自分自身驚いていた。俺は何を言っているのだ。そんなくだらないことに手を出すなんて、狂喜の沙汰だ。さっさと

ここからおさばらして自由気ままなストリートの生活に戻るんだ。誰にも強制など、指図も受けない、流れるような生活に。
　しかし、ついて出た言葉は堰止めらない雪崩のようにしてアナキスの口からこぼれ出していた。
「お前、図書室で俺に宝玉の使い方を教えようとしていたな。他に古代史とか占星術とか作法とかも教えようとしていたが、そんなもんはいらない。宝玉の使い方だけを教えろ」
「・・・・――知ってどうするの？」
「知ってあのヴィクトルを打ち負かす。ラインハルト国で５番以内に強いだとか副総司令官だとかそんなもん知らねえ。今回のことはタイじゃない。今度は同じ土俵で勝負してやる」
「・・・・」
　余った包帯と消毒液を救急箱に戻し、姫はアナキスに視線を合わせた。たっぷり数十秒見つめてから
「だめよ」
「な、なんでだよ！！」
　許しの答えは出てこなかった。
「復讐という不純な動機で教えられるほど、安易に扱うことのできるものではないから。その単純な思考回路のまま宝玉を与えれば一体何にその力を使うか分かったもんじゃないわ」
「こいつ・・・！！こっちが下手に出りゃ知った風な口聞きやがって！！俺はただあいつに泥をつかせたいだけだ。図書室での不意打ちのようなやり方じゃなくて、正面から、正々堂々と！！」
「その態度がだめなのよ。すぐ頭に血がのぼる性格を何とかしないと、冷静になって使用しないと大変な事になってしまうのだから。宝玉は流動性硬化炭素物質でできているの。それを脳内のニューロンと同期させてからその流動性硬化炭素を意のままに操るのよ。つまり、頭でイメージしたものを外部の粘土に投影して武器を作り出すと言えばいいかしら。自由で制約のない貴重な小型武器で数も限られているものなのよ、宝玉は。・・・自分のことも律することが

できない人間が猛獣を扱うことができると思うかしら？それにニューロンと同調する際に不備が生じると脳内に障害が起こり、様々な後遺症を残すことになるしね」
「ぐぬぅ・・・！！」
こうもあっさりと断られるとは思ってもおらず、アナキスは苦虫を噛み潰したように顔を歪めた。
さしもの姫も人差し指を口に、もう一方の手を腰に当てながら顔をしかめていた。まるで聞きわけの悪い子供を諭すような母親のように。
「いいじゃねえか！！別に不純な動機でもやる気があればいいだろが！！それにお前だって俺に宝玉を習ってほしいんだろ！？お兄様のためになるんだろ！？お互いの利益が合ってんだから、それぐらい大目に見ろ―」
「条件があるの！！」
アナキスの言葉を遮るように姫は声をあげた。ズイッと、ベットに座ったアナキスを見下すようにして平板な胸を反らしながら声高に言った。
「な、何だよ・・・」
「宝玉のことは教えるけれども、他のお勉強もすること。そうしなければさっきも言ったけれど本当に危ないんだから。それに言葉使いも気を付けること。これから宝玉を教えるにあたって私以外の人の手も借りなければならない場面も出てくるわ。その状況の中でいつものきたない言葉使いは御法度よ。そしてあんたの立場ももう一度思い出してちょうだい。あんたはお兄様の影武者なんだから、それを忘れないようにいつも気品と上品を体に染み込ませておくこと」
「なっ！！それって今までお前が言っていたこと全部じゃねえか―」
「最後にもう一つ！！」
「ま、まだあるのかよ・・・！！」
「・・・・・・・・わ、私のことはこれからは『姫』と呼ぶこと。い、いいわね！？」

「・・・・何でだよ？」
「何でって、あんたばかぁ！？今言ったじゃない。あんたは私のお兄様、つまりはラインハルト国の皇子様なのよ。そのお方が私を呼ぶ時に『お前』だとか『おい』だとかは不自然以前に無法者すぎるでしょ」
「でも、俺はあのシルマールとか言うエロい枢機卿曰く、記憶が無くなったお兄様の役なんだろ？だったらそんなややこしい設定いらないだろーが」
「・・・・何か言ったかしら、お兄様？私の言うことが聞けないのかしら？宝玉を習いたいんじゃないのかしら？」
「・・・・・・・・・お、仰せのままに、姫」
勝ち誇ったように満面の笑みを浮かべた姫はその言葉に小さく身震いした。まるで野犬を調教するブリーダーの如く、ニヒルに口元の端を吊りあげたまま、アナキスを見返していた。
方向性を間違ったのではと心中で自問するアナキスのことなど知らずに。

『影武者の悩み』（前書き）

ある時の影武者の悩み。

『影武者の悩み』

アナキスは隣で寝ている姫の寝顔をのぞき見た。そっと視線を走らせればすぐそこにいる姫の顔があった。手を伸ばせばすぐにでも届く範囲にいる。軽い寝息を立てて肩がゆっくりと上下するのをみつめながら、一体どんな夢を見ているんだろうかと想像した。

「・・・・いや、夢は見ないって言ってたな。現実主義だからな。困ったことに・・・・」

顔半分をうずめるように顔半分が隠れている。その表情を見ていると、だんだんと恥ずかしくなってきてしまい見ていられない。乱れたくり色の長髪が優雅に枕の上に波打っており、手で梳けばスーッと止まることなく指の間をすり抜けるだろう。まるで夜空に走る流れ星のようにそれはなめらかな曲線を描いていた。胸が無意識にうずいてくるのは何故なんだろうか。分からない。いつも意地っ張りで強がりでわがままな姫が、こんなにも無防備な状態で寝ている姿を見せられると――許せなくなってくる。どこがどう許せなくなってしまうのかまるで分からないが、とにかく許せないのだ。

「・・・・・反則なんだよ。一体どうすればいいんだよ」

姫は俺のことをどう思っているのだろうか。少しは近くにいてもいい存在だと認めてくれているのだろうか。色々迷惑をかけてし足を引っ張ったこともしてしまったが、姫と過ごしたこの半年間役に立ったこともあるだろう。支えることができたと思える場面もいくつか脳裏に思い浮か―

「いや、そうだ。また馬鹿なことを考えてしまったな・・・・・・・・・・。俺は姫の何だ？」

―兄の影武者

彼女を自分一人が独占してはならない。変な期待を持ってはならない。勘違いが一番馬鹿な行為だ。そもそも、自分では何もかも不釣り合いだ。身分から人脈から知識から、不釣り合いすぎる。―そし

て兄妹という設定からも。
だが、白磁のように滑らかな姫の頬を眺めると触れてみたい、傍にいたいとはかなくも思ってしまう。許されないことを許してもらえることができるとは、この王宮では難しいことだと理解しているがどうしても思ってしまうのだ。
だから―
「俺が兄として振る舞うことができる、最大のことをしてやろう。それが姫に笑顔をもたらしてくれるのならば・・・・それでいい」
ベットの上で向きをかえながらアナキスは視界から姫の顔を消した。ぎしっと音をたてた一人用ベットが不平を洩らすように音を立てた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7909n/

影武者のヒナタ

2011年11月17日03時26分発行